蒼空ノ竜輝兵

雪国裕

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２００７年に書き上げてから、２００９年に改定した文章です。

もともと一本の物語なのですが、規定文章量を越えてしまったので話ごとに分けてあります。

中高の間に書いた作品で、至らぬところもありますが、よろしくお願いいたします。

目次

晴天の慣わし ―― 1
見上げた空に僕らは ―― 10
君が望んだ、生きるコト ―― 22
かの地へ赴く狩人二人 ―― 41
それぞれの生命（いのち）の色を ―― 50
僕等が生きること ―― 75

晴天の慣わし

この広い大地には、様々な生物が命輝かせている。
例えれば――
地を駆ける生物。
水を泳ぐ生物。
そして、空を翔る生物。
これらは多種様々だけれど、
同じ命に代わりないんだ。
この世界の理、生きるか死ぬか。
世界は生と死のありふれる、そんな非情な場所かもしれない。
しかしそれは確かに、世界のありのままを現しているんだ。
残酷だけれども、それを受け止めなければいけない。
そしてその中で人は、生きてゆかなくてはいけない。
僕らが生きること。
それは何処かで、必ず誰かを犠牲にしているということ。
これを忘れてはいけない。
だから。
奪った命のためにも、僕らは生きなければならないんだ。
命は繰り返し、永遠へとつながっていく。
僕たちは生きている。
そして今も。
一つの命として輝いていくために、
未来へと歩み続けていくんだ。

蒼空の竜騎兵　僕らの生きること

「…ん」
どうやら転寝をしてしまったらしい。朧げな意識の中、「僕」は薄目の先に霞む景色を見た。

その視線の先に広がっていた、雲ひとつなき青い空。
彼は新緑の丘の上に横たわっていた。白い砂浜の奥、そう遠くはない海の中に、ぽつんとひとつ、遠くの離れ小島に佇む高い塔があった。
それは彼の視界に、影となって映っている。
――ここに来てどれくらい時間が経っただろうか。そう考えながら目線を空に移す。
広大な空はいつも無言だった。無言だったが、何かを伝えているように感じた。
彼にとってここは特別な場所でもあった。この場所には……思い出が詰まっている。沢山とはいえない、少しだけの。しかしながら薄くはない、大切な思い出が。
晴れた日に、ここに来る。
それが一つの、彼の日課のようになっている。
立ち上がって、それからゆっくりと深呼吸すると、瞬間、新鮮な空気が今まで靄のかかっていた意識を鮮明にしてくれた。視界は次第にハッキリとしてゆく。聞こえる音も、より確かなものになってゆく。意識が鮮明に成ることは、気分が良いが、同時――気分が良くもない。
夢見心地の気分が現実に引き戻される瞬間（とき）でも、あるのだから。
ひゅう、と、心地よい涼しさが頬を掠めていく。その涼しさ、風は、薄着の間から感じられた。
（…さて、そろそろ行くかな）
心で呟いて、彼は歩き出した。その後姿には、どこか寂しさが感じられる。薄着の青年は何もためらうこともなく、まっすぐな足取りでその場を去ってゆく。
後、場に残されたのは、穏やかな風の声だけであった。

小さな民家が立ち並ぶ中で、ひときわ大きい家がある。　豪勢とも言えるだろうか。立派なものだった。
その家の前に、彼は居た。つまるところここが、彼の向かうべき、帰

るべき場所なのだ。
「ふう」
ひとつ息をついてから、背負っていた袋を降ろす。
西に傾き始めた太陽が、彼の顔を夕日色に照らす。風が吹き、抱えた白い花束の花弁と、彼のやや短めの金髪が風に揺れた。
彼がまぶたを開くと、深い海のような美しい青の瞳が現れた。宝石のような輝きを持つ、綺麗な瞳だった。ただ、その中には虚ろな一面も見える気がする。迷いはないが――志の薄れた、どこか「なげやり」な眼差しにも見える。
程なくして、彼は家門をくぐるのだった。
彼の職業は狩人である。危険な生物を狩ることを専門とする、狩人だ。
モンスターハンター。
生きるか死ぬかの過酷な世界を駆け抜ける、怪物を狩る者――それがいわゆる、モンスターハンターと呼ばれる職業である。
そんなハンターである彼らと、そうでない者とでは「差異」が存在するのが確かだ。それは色濃いものであり、世界の理と密接に関わっている。
それは例えば、何気なく行っている「食事」の中でも、見つけることができる。
狩人ではない一般人は普通、運ばれてきた調理を食べるといったことで、命を奪うとかそういったことを間接的に感じ取るだろう。
しかし、狩人なるものの場合は、対象の命を奪うことを自身の手で行い、その様を、五感をもって感じ取る。〝生き物の命を、自身の手で奪う〟。
よって狩人は必然的に、残酷な世界をより近くで知ることになる。
彼らが繰り返す行為――殺生。
狩りは決して「殺し」ではないが、形の上でやっていることは同じにみえてしまうゆえに、一般人の中にはその行為を批判するものも少なくない。
そこで、差異が生まれるのだ。

生き物を殺め続ける彼らに対して、人々は線を引く。
当然ハンターを否定できる理由を、この世界の理に従っている者は全て、持つことは許されないのだろう。
世界は回っている……永遠の輪を描いている。世界の輪廻の中で生きている者ならば、誰も何も文句は言えない。
生きるためには必ずどこかで命を犠牲にしなくてはならないという、この世界の理。どんなに残酷であろうとも、それを受け止めなくてはならないのだ。
――生き続けるためには。
しかし。例えそれを分かっていたとしても、実質ハンターの大半は「罪」の意識を拭えきれずにいる。それはやはり命を奪い取るという行為自体が、大方の人間にとっては厳しく、過酷なものなのであるためだ。ハンターは一般人となんら変わり無い、罪の意識もあるし、後悔もする。苦悩もする。
しかしながら。
彼らが、彼らでいられる理由がある。
それはありきたりな、どこにでもあるようなものだが、それゆえに誰もが抱く権利を許されている。
目標――言わば、志というべきもの。
彼らは自らの目的を持ち、それに向かって足を進めてゆく。
世に名を残そうと高みを目指す者。
仲間と共に生き、それぞれの成長を喜び合う者達。
己の腕を磨くため、さらなる強敵に立ち向かう者。
貧しい日常生活を養うために、糧を得ようと日々努力する者。
このような例を挙げれば、ハンターの数だけ存在する。志す内容、意味。その種類は様々だ。
だが同じことが言える。
それは「このような様々な目的が、夢が、彼等を支えているのかもしれない」ということ。
これが、彼らが、彼らで居続けられる理由。
――しかし、現実はそう甘くはない。

危険な生物を相手にしている以上、生命の保証は誰も出来ない。実際に高名を夢見て死んでいった者は少なくない。
いや、むしろ多い。
ハンターの世界は厳しい。勇敢でも臆病でも、冷酷でも心配性であっても、結果的に自分の命をかえりみずに、怪物を相手に向き合わなければならない。例え、行き着く結末が終焉であったとしても。
だからこそ、人は世の人々はそんな彼等に対して、敬意と畏怖の意を込めてこう呼ぶのだ。
怪物を狩る者――モンスターハンター、と。
その一部として、一員として。
そして一人のハンターとして、エレイサス・アークはここにいた。
エレイサスは扉の前で立ち止まったまま、そこで一旦、動きを止めた。
「……」
無言のまま、エレイサスは玄関の戸を開いた。そして、暗がりの室内の一部を見る。
「ただいま」
誰も居ない室内に空しげに語りかける。居間に進み、そこにあるテーブルに小袋と、紙で包装された花を置く。
そして近くの椅子に腰掛け、天井を仰ぐ。
一面灰色の天井は、まるで曇り空のようだ。
彼の部屋を見回してみれば、家の中は綺麗に片付いており無駄な物は少なかった。目立ったインテリアも装飾もない、どちらかというと生活に必要不可欠な家具などがその空間を多く占めていた。
その例を挙げてみればタンスやベッド、食器棚など、本当に生活に必要なものだけだ。そうでないものといったら、道具をしまっておく箱や、鎧や武器を掛けておく骨組みなど、狩猟生活用の家具だろう。
それらはどこか存在感があり、彼がハンターであることを示すかのように堂々と居座っていた。いわば、自らの腕を誇示するような代物である。見ず知らずの人間が入ってきたら、その存在感の大きさゆえにどこか、威圧感を感じるかもしれない。

だがハンターの家は、こういった風景こそが普通なのだ。どこか威圧感があって、家自体は無機質で殺風景などというのは、ハンターにとっては普遍的な事。

むしろ、様になっている。

しかしそんな殺風景な家であっても、彼の家は目立っている。それはやはり彼の職、ハンターが関連している事を否めない。

ハンターは一回大きな狩りが成功すると、数ヶ月ものの間何もしなくても暮らして行けるほどの収入を得ることが出来ると、そう言われる。大きな――危険な狩りを繰り返し成功させれば、おのずと大金が懐を埋めつくす。

彼、エレイサスは、今まで得てきたそのような収入でこの家を建てた。それは言うまでもなく、ハンターという職業が可能にした事である。命をかえりみずに戦う者は、それ相応の見返りをもらう――多大な収入を得る。それこそ、若者が家を一軒建てても平気というくらいの。

しかしながらハンターが皆、そうではない。この町に在住しているハンターは多いが、町並みから分かるように、ハンターかと言って皆、彼のような豪勢な家に住んでいるわけではない。成功しなければ、狩りが上手く行かなければ、いつまでも家は大きくならない。逆に失敗が続けば、最悪家は平坦な地面となる。ハンターは報酬が多大である反面、消費も損害も大きい。

初心者は初心者の、中級者は中級者の、上級者は上級者なりの、その者に見合った家があるということだ。逆を言えば、家を見ればその者の実力も分かるということにもなる。

この町のハンターの殆どは新人が占めている。逆に彼のような手馴れは、彼以外もう居ない。

だからこそこの家は目立つ。

豪勢だと。図らずもそう――みえてしまうのだ。

エレイサス・アークは、見方によっては浮いてしまっているのかもしれない。

いや実際、彼はこの町から浮いてしまっている。あるいはこの町の

ハンター達から、どこかで切り離されている、というべきだろうか。
エレイサスは目を瞑り、黙り込んでいた。それはまるで瞑想をしているようである。
静寂が室内を満たす。
（ひとり、か）
エレイサスは思う。
ひとりきり。本当に「僕」だけの、ひとりきりの空間。
――それももう、慣れてしまった気がする。
エレイサスは一人の時が多い。というよりも殆ど、始終一人だ。彼の狩猟形式は個人狩猟――ソロハント形式であり、ハンターになった頃からこの形はほとんど変えていない。
ただ、今では稀有なものとなってしまったようだ。
彼がハンターになったのは十五歳。遡ること、およそ八年前のことである。
あの頃はここにもハンターが少なかった。それゆえ、同一のハンターに依頼が殺到、集中していた…そんな時期でもある。
昔の話をしよう。
狩りを専門職にする狩人が少なければ少ないほど、一定の狩人がモンスター討伐を請負う頻度も当然高くなってくる。この町はその典型的なタイプだった。
危険なモンスターを狩り、人の命を救う。それはたとえ間接的であっても、偉業に変わりない。人々はそんな狩人に、金を払った。助けて欲しいから。身を護るすべのない彼らは、すがる気持ちで狩人にモンスター討伐を依頼した。
人を救うということ。もっとも、エレイサス本人はそんなおおごとには思っていなかったが、実質受け取る報酬金は大きなものだった。エレイサスは人を救ったという実感を、手元の報酬という形で得たのだった。
それを日々積み重ねれば、とても大きなものとなる。エレイサスは日々の糧によって、裕福な生活が出来た。少なくとも、一般の人よりは数段、いい生活をしていたと思う。

だが反面、彼は様々な傷を負う。依頼が集中すれば、当たり前だが危険な目に遭うことがある。その時の傷は大小数えては数え切れず、バラバラ、色んな箇所にあった。

ハンターにとっては勲章とも言われている傷であるが、彼はそんな概念は持っていなかった…いや違う、そのような傷を気にかける時間も、余裕も無かったというべきか。依頼を請負うことに、手一杯であったから。

それほどに、彼は始終忙しかった。

だからこうして家に帰ってゆっくり羽を伸ばしてくつろぐなど、そんなことも稀だった。

――おおよそ、数年前までは。

ここ数年の間か。ハンターという職業が普及したこともあってか、この町にも随分と多くのハンターが集まってきた。

それから町は、新米ハンターの育成に力を入れはじめた。逆に、ここでもともと生活していた古参のハンターたちには、滅多に依頼が回ってこなくなった。いざ依頼が来るといえば、それは強力な、討伐の難しいモンスターを相手にするものなど、そんなものばかりである。

古参の者たちの栄光は、時が流れるにつれ廃れていった。

しかしながら、彼らはこれを「機」にする。古参のハンター達は町を離れ、腕の立つ者が集まる「街」を目指した。こうすることで、彼らは自身に見合った、居場所を手に入れようとした。

自分達の居場所は自分達で掴み取る――そういうものだ、ハンターという者は。

目的のため、この町に別れを告げていった狩人達。その最後の一人を、エレイサスは覚えている。馬車の中から手を振り、次第に遠のいてゆく仲間の面影。

そしてそれに「僕ら」は、手を振り返した。

鮮明に映し出される記憶のページの数々。

それらはまるで儚い夢のように、彼の脳裏に焼きついたままである。

古参のハンターの中で唯一残ったエレイサス。
彼はこの場所で狩りを続けている。
町のハンターの中から、どこか浮いてしまった存在になった今でも。
そしておそらくこの先もずっと、続けるだろう。
自分なりの「答え」が出るまでは、ずっと。
――エレイサスは目を開く。そこには灰色の天井があった。そして彼はしばらくの間、そのままでいた。
やがて彼は視線を、仰ぎ見ていたそこからテーブルへと落とした。すると、視界にあるものが映る。
「あ」
はっと思い出したように、彼は紙に包まれた数本の白い花を手に取った。そして後ろの棚の上の、青い花瓶の前にそれを翳す。
「フラン」
彼の表情が、一見して楽しげで、そして悲しげそうに歪む。
「明日は晴れるよ」
そして彼は青い花瓶にすっと、白い花を挿した。

見上げた空に僕らは

青い海と、青い空が冴える新緑の丘。その上で僕らは夢を語った。

「僕は、一度で良いから空を羽ばたいてみたい。無理かもしれないけど、きっと…」

子供っぽい夢を語る自分に、エレイサスは羞恥を覚えた。どういった経緯でこの発言に至ったのかさえ、今は忘れてしまうくらいに取り乱す、心の中で。

「…なんて…馬鹿みたいだろ？空を飛べるはずもないよね。人間なんだし」

彼は困り果てた顔で言った。前言を撤廃する意味を込め、ついでに身振り手振りも入れてみる。正直、恥ずかしかったのだ。こうして自分の夢を暴露するたびに、笑われて終わってしまうということを、知っていたから。

しかし傍らの彼女は、微笑んだ。

「偶然って凄いわよね。私と同じ夢を持っていたなんて」

「…え？」

からかわれたのか、と一瞬思ってしまう。むしろ警戒…疑心暗鬼になる。それほどに彼女の発言は、エレイサスの予想から遠ざかっていたのだ。

現実感が遠のく。そんな言葉が相応しい謎の感覚がエレイサスを包む。

「実は、私も空を羽ばたいて見たいなぁなんて、思っていたの」

続けて、彼女はごく自然に言う。

信じられなかった。

「え、本当？」

湧き上がる期待を抑えずにいられなかった。エレイサスは即、そう聞き返す。

「本当よ」

彼女は深く頷いて、言う。どうやら、本心らしい。彼女は冗談を良

く言うけれども、言う場をわきまえている。だからエレイサスは、彼女を信じてみる。
「…へぇ…本当…偶然って凄いや」
彼女は自分より、一つ年上。そんな女性が自分と同じ夢を持っていたのだ。こんなにも子供っぽい夢を、この彼女が。
まず、それに驚いた。
そして同時。いやそれから少し後に、嬉しさがこみ上げてきた。
自分の持つ考えに共感してくれる人が、すぐ傍にいるのだ、と。その感覚を直に感じられたような、そんな気がした。
エレイサスにとって、彼女はかけがえのない人であった。
風になびく、長いベージュの髪。
澄んだ綺麗な、大きな緑色の瞳。
細身で色白という、一見して軟弱にも見える身体。
しかしながらそれに反して強い意志を持った、
今も、優しい面持ちを自分へ投げかけてくれている女性の名は、フラン。
彼女は綺麗で、そして優しかった。
エレイサスはどこか気恥ずかしくなって、うつむく。
しばし沈黙が続いたが、
「折角だし、その夢を叶えましょう、ね？」
唐突に、フランが口火を切った。彼女の言葉に、再び、エレイサスは現実感が遠のく。夢見心地というかなんというか、幸せな気分だった。
――しかし、そんなこと。
「そんな…だって」
エレイサスは困惑した。自分が言ったのは、「大空」を翔るという限りなく不可能に近い夢。明らかに現実の範囲を超えているのだ。
「いいの」
フランは言う。
見れば、彼女は優しい笑みを浮かべていた。とても、儚げに笑っているように見える。エレイサスは確信した。

――彼女は知っているのだ。
そして、自分も。
それがどんなに、儚い夢だということを。
「時間を掛けてもいいから。私たち二人だけの夢…約束にしましょう。ね？」
フランは、すべてを包み込むように言った。
「…わかった。約束するよ」
気がつけば言葉が出ていた。柄にも無く強気に。それはエレイサス自身、信じられないことであった。この自分が今、「不可能を可能にすること」を、約束したのだから。
「よかった」
それを聞いてフランは安心したようで、綺麗に微笑む。彼女の笑顔は素敵だった。
「でも、どうやったら人は飛ぶことが出来るんだろう」
エレイサスは言った。
この時代、飛行技術などほぼ無かった。いや、どこかの王国にでも行けば見つけることが出来るかもしれないが。
どちらにせよその様なことが難しいことに変わり無く、さらに彼らの身近では、そういった技術の結晶は皆無で、空を飛ぶということ自体が信じられない夢のような話であった。いささかの実感も、沸くものではない。
しかしながら、彼は「飛行」という情報を小耳に挟んだそれだけで、期待を、憧れを膨らませていったのだ。
実感の無い広大な空への、思い。
いいや、厳密に言えば空への憧れの「対象」は、世界のどこにでも存在していた。
「人に空を翔る翼はないわ。だから、乗り物かしらね」
「そうだね。飛竜のようには飛べない、僕らは人間だから」
子供のような夢を大人のように考えて、
現実的に話を進める二人。
人は空を飛ぶことは出来ない。それは人として生まれた時点で、決

まっていたことだ。人に、空への権限は、もとより与えられていない。
しかし与えられたものへ憧れを抱くことは、できる。
その対象が、天かける――飛竜（ワイバーン）だった。
人が決して手の届かぬ碧空を縦横無尽に駆け巡る、生命と力の象徴。
大空を翔る天空の覇者たち。
そして、彼らの恋焦がれる「空」への憧れを膨らませた存在。
エレイサスがハンターを目指した契機。それは、自らあの飛竜たちより近くに寄ってみたい、そして戦ってみたいという、そんなほんの好奇心だった。
そして彼女フランも、飛竜への憧れを抱いていた一人だ。空を駆け巡りたいという思いがあるとは、今の今までエレイサスは知らなかったのだが、どうやらそういった思いがあったから、彼女は時折「私がハンターだったら」と言っていたのだろう。
しかし、彼女は彼と違って、ハンターにはなれなかった。病弱な身体が災いして、願いを叶えることが出来なかったのだ。出来ることなら、彼と同じハンターとなって、エレイサスと世界を駆け巡っていたかったと、彼女は言っていた。
ハンターという生業の厳しさを知らないフランに、果たして本当にハンターになる覚悟があったのかどうかわからない。
ただ、彼女に「活発に生きていたい」と健気に願う気持ちがあったのだということは、エレイサスにも分かった。
そんな彼女に何かしてやれないだろうか。
考えた結果、エレイサスは自分の狩りの話を聞かせることにした。
不器用ながら言葉を紡いで、必死に話す。全ては、彼女を楽しませてあげたかったから。お世辞にも上手いとは言えなかった彼の話を、フランは決して嫌がることはせずに聞いていた。
むしろ、楽しげに。
手強い飛竜を討伐した時の、達成感。生きている実感。
可愛い飛竜のヒナの神秘的な姿に、おもわず見とれてしまったこ

と。
この地方では珍しい飛竜を、森で見た事。
美しい水晶の柱を、洞窟の奥で見つけた話。
この町へ訪れた、憧れのハンターの話。
自分が実際に見て、触って、何も体験できなくとも。彼の持ち帰ってくる土産話と、傷つきながらもここに無事帰ってくる彼の姿、笑顔を見ることで、彼女は元気になれた。
「あのね、エレイサス」
高鳴る鼓動。フランは意を決したように、言う。
「私の事、どう思う？」
刹那の沈黙。
「…え？そんな、どうって言われても…」
エレイサスはその後、口を閉ざしてしまう。困惑していたのだ。
「…一緒に居られると、嬉しい」
エレイサスは間をおいてから、照れくさそうにして言った。
彼なりの、愛情の言葉。好きか嫌いか、そのどちらかをハッキリさせろとは言わない。ただ、曖昧でもいいから、フランは彼の愛情を感じたかった。
エレイサスの照れ隠しの仕草の一つ一つを見て、フランは微笑を浮かべる。
「ありがとう…私は、もっと嬉しいわ…」
大きな喜び。それは彼女の顔に確かに表れていた。
沈黙の中。
徐々に。そしてごく自然に。二人の距離が縮まっていく。
互いに鼓動を早くして――
「おーい！」
その声で二人は一気に、大げさに離れる。
「あ、すまん」
場の空気に、その人物は謝った。
向こう側から慌ただしい様子で駆けてきたのは、男だった。この男は、この町で依頼を受ける係で、ハンターを見つけては依頼を受けて

くれと声をかけてくる。この町ではハンターが少ないから、断るに断れず、殆どの者は受注する。
もちろん、エレイサスも。
「お取り込み中悪いんだが、緊急の依頼が入ってな。竜が、すぐ近くの森に出たらしい。今から…準備してくれないか…ハンターは殆どが狩りに出て行ってしまっていて人手が足りなくてな…頼む」
まだ息を荒げている男は、エレイサスに懇願するように言う。流石に、これを断るとは言えない。
ちなみに、エレイサスはこれを断ったことは一度も無い。仕事に関しては、彼は抜け目が無いのだ。
「なるほど。それで、どんな飛竜？」
「ああ…閃光を発していたという…」
エレイサスは確信する。
「ゲリョスだ」
猛毒を持つ毒怪鳥。
ゲリョス。
その毒は、それこそ毒を弾く鎧をまとっていないものであれば、たった一分足らずで瀕死に陥らせるといった、劇毒だ。
そもそも自然界のモンスターの毒は皆、自身と同じような怪物（モンスター）を相手にするものである。だから、人間など簡単に死に至らしめてしまうのだ。
――狩られる前に、狩らなければ。
直感的にそう思って、エレイサスは立ち上がる。
「わかった、急いで行くよ」
「助かる…至急品は後で持たせるから、準備が出来次第来てくれ」
そう言って、男は足早に戻っていった。
「そういうことだから…じゃあ、またね」
エレイサスは小さく手を振ってフランに言う。それを見るフラン表情は少し、悲しそうだった。
行って欲しくない。
まるで、そう物語っているかのように。

「ええ。きっとまた、会いましょう」
フランはそんな中でも必死に笑顔を作った――彼にはそう見えた。
「あ、エレイサス！」
走り出そうとしたエレイサスを呼び止めるフラン。
「え、なに？」
エレイサスは「なんだろう？」と思い訊いた。
「その…あのね」
フランは一度躊躇うが、口を開いた。
「どうか、無事に帰ってきてね。貴方はその…大切な人だから」

森の中は相変わらず、鬱蒼と生い茂る草木で覆われていた。巨木から地面へと伸びる根は、余所見をしていれば足を取られてしまいそうだ。
そんな悪条件の中でも、彼ら…ハンターは幾度の経験によって順応し、その場を自分達の狩場としてしまう。
エレイサスは森の中を駆けていた。
彼の背中にはランスと、それと対の盾が背負われている。鎧とは別に外付けされた、背中の固定具にしっかりと固定されたそれは、黄金の輝きを放っていた。
その槍の名は〈バベル〉と言った。
「いた…」
エレイサスがそれを見つけるや走りを止め、それからはそろりそろりと慎重な歩みで、茂みを進んでいく。彼の視線の先に、今回の目標（ターゲット）が首を伸ばして、辺りをうかがっている姿があった。
　ややずんぐりした暗めの青紫色の体。巨体の割には少々控えめな翼。大きな出っ張った金槌のようなトサカに、ガラスで出来たような目。尻から飛び出た細い尻尾は不規則に揺れていた。
　毒怪鳥ゲリョス。このモンスターは正確には飛竜ではなく、鳥竜種に分類されている。どちらかというと、外見は鳥に近い。だが、能力、生命力は紛れなく「竜」だ。
　エレイサスはしゃがみこんで、徐々にゲリョスに忍び寄る。兜の面

貌を下ろし、その縦の隙間から向こうを窺った。慎重に、なるべく見えないように、茂みに身を潜めながら。
エレイサスの鎧は赤かった。燃えるような赤…と攻撃的な色をしていて、同じく攻撃的な形状をしている。そういうこともあり、ここでは少々目立ってしまう。
〈レウスシリーズ〉。
ワイバーン、火竜リオレウスから作られたものだ。狩りに慣れた者でも倒すことは難しく、強力な飛竜種に分類されている竜である。
ハンターであるからには鎧の素材は自分で集めなければならない。
それは――簡単なことではない。
鎧に使える素材を選び抜き、結果、持ち帰れるのはごく一部の素材だけだからだ。上質な鎧を造るには、上質な素材を選び抜き、それだけを持ち帰る必要がある。
それは一頭からごく一部しか取れないことが殆どである。一式揃えるには、一、二頭では足りないのだが、エレイサスはそれを、現在四頭狩っていた。
ゲリョスの目が、ぎょろりとエレイサスを睨んだ。
見つかったのだ。
ギャアアア！
奇声を上げて、ゲリョスはその場で飛び上がり、驚いたように羽をばたつかせた。
滑稽なこの動きでも、巻き込まれれば致命傷になりかねない。竜の何気ない動作の一つ一つ、それが人間にとって脅威なのである。
ゲリョスは首を左右に振り、無茶苦茶な態勢になりながら突進してくる。
その体が進むたび、前方の木々の枝は折れ跳び、宙を舞う。
その足が地を踏みしめるたび、地は深く沈み込み、地響きがおきる。
もう、エレイサスの目前までに迫る巨体。
勢いをまるで殺さず、地面に滑り込むようにして倒れこむゲリョス。前方の木々はへし折れ、ぬかるんだ地面は削られて宙を舞う。

ゲリョスは起き上がりすぐに首を回し、辺りを見回した。獲物はいない。
そのとき。黄金の槍が突如ゲリョスの背後の草むらから現れ、その脚を突いた。エレイサスの〈バベル〉による下段突きだ。しかし傷は浅い。少量の血しぶきが飛ぶ。
ゲリョスの外皮の肉質はゴム質である。弾力に富んだそれが、攻撃の威力を軽減させてしまう。更にタフでしぶとい。そのために持久戦になることもしばしばある。
狩りを長引かせるのは危険だった。体力の多さも回復速度も、向こうが圧倒的に上であるから。いや、そもそも人間と竜とでは、体力面ではとても勝負にならない。必然的に、狩りが長引けば長引くほど、戦況は人間にとって辛いものとなる。
無論であるが、エレイサスは毛頭狩りを長引かせる気などなかった。
ゲリョスは頭を伸ばして、硬い嘴でエレイサスをついばもうとするが、彼はそれを後ろに跳び避け、隙の出来た頭に一撃を加える。火花が散り、矛先がトサカを僅かに削る。その後、一旦距離をとる。
すると、その後すぐゲリョスは身体を回転させ、尾を振り回した。遠心力を得て伸びたゴム質の尾は、ムチのように広範囲に振るわれた。辺りの木々に当たっては、太い打撃音を残してゆく。少し遅れていたら、これにぶたれていただろう。
回転をやめ、ゲリョスは自分が獲物を見失ったことに気が付く。急いで獲物を見つけようと向き直るが、居ない。
「ここだ！」
木陰の奥から、槍を構えて滑走してくるエレイサス。ゲリョスの背後へ接近、槍を突き出す。勢いの乗った矛先は細い尾をやすやすと貫通し、ゲリョスは悲鳴と共に傷口から多量の血を撒き散らした。
弱点は首や尾といった、皮の薄いところ。エレイサスは常にそれを意識し、好機をうかがっていた。反撃を盾で受け流し、再びそのときを待つ。
ランスは矛先で攻撃するゆえ攻撃できる範囲が狭いが、リーチを活

かし弱点をピンポイントで狙えるといった利点がある。
そして、技術があればそれも真価を発揮する。
二度、三度、四度と、「弱点のみ」に攻撃を加えるエレイサス。
彼は見た目、細身でありながらこの大槍を巧く扱うことが出来る。攻撃を的確にガードし、攻撃を受け流す。攻めに転じるときは勢いを乗せて、弱点に重い一撃を加える。まるで槍を手足の延長としているようだ。この全ては積んだ経験によって実現されたもの。
ゲリョスは怒っていた。それは人間と同じく…いや、生物ならば「怒り」の感情を覚えるものは、居ても当然。
それは竜も例外ではない。ゲリョスは目の周りを真っ赤に充血させ、口からは毒の息を霧のように漏らしていた。それは、吸い込んだだけでもその瘴気に侵されてしまうほど強力な毒の霧。
動きは俊敏になり、怒りにまかせて攻撃は荒っぽくなっていた。
こうなると防戦に移行するにほかない。エレイサスは盾を構えたまま移動しつつ、不規則な攻撃を防ぐ。
ゲリョスはこちらに走ってくる……と、突如エレイサスの目前で立ち止まる。
カチン、カチン。金槌上の「それ」が音を立てた。
ゲリョスは自身のトサカを打ち付けることで、強烈な「閃光」を起こすことが出来る。それをまともにくらえば、目をやかれ一時的に視野を失うことになる。と、そんな強烈な光が目と鼻の先で放たれるのだが、ゲリョス自身は特殊な目の作りのおかげで無事なのだ。
それが今まさに今――行われようとしていた。
ゲリョスは翼を広げ、胸をそらす。予備動作だ。
ギン！と鈍い音が鳴り、閃光は起きなかった。その代わりに、ゲリョスの悲鳴が辺りにこだまする。
バベルの矛先がトサカを折り飛ばしたのだった。この器官がなければ、閃光を起こすことも出来ない。
ギャアアアアア！
奇声を上げて、ゲリョスは毒液を辺りに撒き散らす。痛みからなのか、それとも怒りからなのか。それは全く判らない。

口から吐き出された毒液を盾でしっかりと防ぐ。当たった部分はジュウと音を立てて煙を上げるが、なんら気にはしない。
相手の体力は底を尽きているはず。
エレイサスは攻撃のすべてを全て弱点へ叩き込む。
――決める。
エレイサスは跳ぶように勢いをつけ、ゲリョスに突進する。
「はあっ！」
腕に渾身の力を込め、エレイサスは槍を突き出した。それはゲリョスの胸部を突き、やがてゲリョスは…だらりと力が抜けたようにその場に倒れ、力尽きたのだった。
エレイサスは念のため、ゲリョスに近寄り恐る恐るその顔を覗きこんでみる。
ゲリョスは時たま、危機が迫ると「死に真似」をしてハンターをやり過ごすことがある。また、油断して近づいてきたハンターを強襲することもあるのだ。
だからエレイサスは確認をした。
ゲリョスは、虚ろな目をしていた。それは、出会ったときからなんら変わっていないように感じる。いや実際、何も変わっていない。
しかし、エレイサスは直感的に感じる。倒れているゲリョスもう、「ここ」にはいない、と。
現に、しばらくたってもゲリョスはピクリとも動かなかった。
標的の死と、自分の生。
それらを悟ったエレイサスは、そこでようやく力を抜いて槍を背中に収めた。

すっかり暗くなった道を、月明かりを頼りに進む。曲がり角を曲がり、すぐに自分の家が見えた。
家の前に女の人が立っていた。
確認するまでもない――やはり彼女であった。
「…おかえりなさい…」
震えた声で言うフラン。それは決して、寒いという理由からではな

い。
理由は分かる。
不安感だ。
それも、「行く側」と「待つ側」の溝から生まれる、底知れぬもの。
「ただいま…帰ったよ」
それが分かっていても。実際に立つ側になって見なければ、相手の心境を理解することなど出来ない。彼には今は、「ただいま」と言い、自分が無事五体満足で戻ってきた――その姿を見せることしか出来なかった。
それ以上は、出来ない。
病弱で、そもそも外出していることさえ苦である筈の――そんな彼女が、自分の帰りを待っていた。
その事実が、嬉しくて、怖い。
――僕らの周りに取り巻く生と死は、いつと決まり無く訪れてしまうものだから。
ふと。今日の狩りを思い出し、そんなことを思ってしまう。
僕も彼女のいつか、そうなってしまうんじゃないか。
（いや……そんなこと、考えるべきじゃない）
「フラン。明日も僕の話を聞いてくれるかい？」
「もちろんよ」
「…ありがとう」
明日も明後日も、ずっと先も。
彼女と共に青空を見上げられれば、それでいい。
心の底に眠る不安を抑え込むように。
明日――未来を考えながら、彼は思いを馳せた。

君が望んだ、生きるコト

「よし」
装飾店から出てきた彼の第一声はそれであった。
右手に包装された花を、左手に小さな箱に入れたそれを、それぞれ大事に握り締めながら、エレイサスは道を小走りで…いや走りながら思った。
何の変哲もないような、どこにでもあるようなデザインの指輪。
果たして、これを彼女は気に入ってくれるだろうか。もしかすると、気に入らなくて怒り出してしまうかもしれない。
なんて、あるわけないじゃないか。
……と、そんなことばかりを柄にも無く考えてしまう。
彼女と出会って半年。ずっと思い留めていた想いがあった。狩りで忙しいという言い訳をして、今まで言い出せない自分が不甲斐なかった。しかし、今日こそは。
自分はフランが好きだと、そう伝える。
「よし、よし、ようし!」
何度も自分に活を入れながら、彼は走っていった。
そして彼は彼女の家の前に着いた。
フランの家は、エレイサスと違い普通の町民らしい、平凡な小さな家だ。ここで彼女は、両親を亡くしてからずっと、独りで暮らしている。身体が弱いといっても、一人で生きて行けないというほどではないと、彼女は言っていた。
現に、こうやって彼女は逞しく生きているのだ。
「あれ…」
いざ扉の前へ来て、急に自信が失せてゆく。
どうして。先ほどまでずっと活を入れていたし、頭の中でも予行練習を繰り返していたではないか。不安なんて…少しはあったけれど、むしろ自信のほうが勝っていたはずなのに。
物凄く緊張してしまう。

下手をしたら狩りのときよりも、緊張しているのかもしれない。
呼吸が乱れる。
「どうしよう…ここまできておいて僕は…まったく、ああ全く」
どうしようもなくて、その場で地団太を踏む。何時ものように会いに行くだけなのに、どうして「真意」が違うだけで、こんなにも意識は変わるのだろう。
そんな時。
「あれ…エレイサス？」
フランが窓越しに、家の前で独り言を呟く自分に気付いたのだった。
彼女とばっちり、目が合ってしまう。
「あ、ああそれは、そのね、用があって」
不自然すぎる。
エレイサスは苦笑する。
フランは小さく笑う。
「ふふ…まだ何も聞いてないけれど」
どうやらもう、逃げさせてくれないようだ。エレイサスは玄関前から窓の前へと移動する。
「…大事な用があって、それで来たんだ」
大方気持ちの整理がついたエレイサスは、思い切ってそう切り出した。
窓の奥のフランの瞳を見る。澄んだエメラルドグリーンの瞳を。
「はい、これ」
背後に隠していた花束を渡す。窓の奥のフランへ。
「わぁ」
これは以前、エレイサスがフランを狩場に連れ出してあげた際に見つけた花。その時、フランが気に入って持ち帰ったもの。
白い花弁が美しい、綺麗な花だ。
「あと、これ…」
そう言って、小箱を開ける。すると、輝きを帯びた白銀の指輪がその姿を現した。

「これは…指輪？」
「あ、ああ」
メインであるところの指輪が、まるでオマケのようになってしまったな、とエレイサスは内心苦笑しつつ。
高鳴りを覚えながら、震える声で、
「僕はフランが…好きだ。だからその…これからも、一緒にいてくれないか」
確かに伝えることが出来た、素直な気持ち。
「はい」
フランは澄み切った空のような、飛び切りの笑顔を見せる。
「本当に嬉しいなぁ。私も大好きよ。エレイサスの事」
…それと、感動からか、目が潤んでいる気もした。
彼女は指輪を受け取って、
それから、
「じゃあ私からは……そうね」
そう切り出してきたのだった。
「？」
その意味を、エレイサスは全く分からない。
そんな中、フランは。
「あなたがくれたものに、私もお礼をします！」
病弱で静かな印象が強い彼女からは到底想像も出来ない、ハッキリとした強い口調で言った。
それからフランは首に手をやり、「それ」をはずし、やがて細かな鎖の付いた「それ」をエレイサスへ差し出した。
「私からの、せめてもの気持ち」
「ええ、でも悪いよ…それって」
竜の模様が彫られている、銀のペンダント。
「うん。お母さんのものだけど…それでもいいの。さぁ……受け取って！」
白い花よりも。
銀の指輪とペンダントよりも。

彼女の笑顔がとてもまぶしく、エレイサスの目に映った。
出来ることならばこの幸せをかみ締め続けたいなんて、そんなことを柄にも無く、思った。

「…フラン」
恋人の名を呼んで、彼は目を開ける。
辺りには緑が美しく、その中に白い墓石たちが平然として並んでいる。
花が目の前にある。
彼が手向けた、白い花。
白い花弁が美しい、綺麗な花だ。
「三年目か。早いものだね」
エレイサスはしみじみと言った。
「あの日」から三年間、彼はハンターとして生き抜いてきた。
三年間。
考えてみればあっという間だった気もする。
狩りの回数はあの日を境にし、極端に減った。昔のように何かに、憧れに向かって走り続けていた頃とは違う。狩りはただ生活を養うためだけの、一定のリズムを取るようになっていった。それは見方によっては安定したとも捉えられるし、また別の視点では狩人としての質が落ちた、とも言える。
いずれにせよ、彼はその双方のどちらかに自分を定めることは――出来ていない。
風が吹き、花弁がひらひらと揺れる。
――その時だった。
「おい、エレイサス！」
そんなとき、どこか遠くから男の声がした。慌てふためくようにエレイサスは目を大きくし、辺りを見回す。
「？」
遠くに人影が映った。そして、それは徐々に近づいてくる。
「おーい!!」

もう一度声がした。声はエレイサスの鼓膜にかじりついた。随分と大きな声だ。
声の主たる人影がこちらへ向かって走ってくる。誰だろうか。その像はぼやけていたが、近くまで来てそこで、その顔を完全に認識した。
やはりそうであったか。
長身で、
黒髪で、
面長で、
切れ目の、
そしてこの低い声。
「…ザン！」
エレイサスは久しぶりに友の名を呼んだ。
「やっぱりここにいたか。久しぶりだな、エレイサス」
ザンは生き生きした声で、彼の名を呼んだ。
彼――同い年のザンとエレイサスが出会ったのは、エレイサスがハンターを始めて一年後、つまるところ七年前になる。
ザンが用事の為、この町に立ち寄った際に彼らは顔を合わせた。
最初は売り上手な商人かと思ったが、話すとすぐにハンターだと分かった。ハンターといってもエレイサスのような剣士ではなく、ボウガンと呼ばれる銃を扱ういわゆるガンナーだった。
ザンはこの町を気に入ったらしく、それで滞在することになった。ザンとは、一緒に狩りに出かけたことは少なかったが、「話し相手」としては仲を深めた。
まだ経験の浅かった彼らは、情報を交換しつつ腕を上げていく。
数年が経ち、ザンは経験を積むため、そして腕を磨くためこの町を離れ、大きな「街」に出て行った。
そしてそれきり、連絡もなかった。
しかし、
巡り合わせというものは唐突だ。
今こうして再会…現在に至るというわけである。

「それにしてもザン。急にどうして」
突然の再会に目を疑うエレイサス。
「ちょっとこの近くに用があってなぁ。それで立ち寄ったって訳さ」
なるほど。エレイサスは頷く。
「ふうん。じゃあなぜ僕がここにいるって分かったんだ？」
やっぱり、とか言っていたから。とエレイサスは付け足した。
しばらく会っていなかったザンが、急にここに、しかも自分の目の前に現れたのだろうと。
「はぁ…分からないのか…」
「うん、まぁ」
エレイサスの答えにザンはため息を吐く。
「…答えは簡単さ。いいか。お前がここに来た理由を考えてみろよ」
エレイサスは視線を上に向けて少しばかり悩む。
「まったく…鈍いなぁ」
墓石の前にしゃがみこむザン。その手には一輪の白い花が揺れていた。
エレイサスは気が付いて、思わずはっとした。
「確か……3年目に、なるんだよな」
ザンがしみじみとした口調で言った。
――決して忘れていたのではない、忘れるものか。
エレイサスは慌てて頭を下げる。
今日は彼女の、フランの命日。
エレイサスとザン。
二人は暫くの間、その場で会話を交わしていた。
男の声が、談笑が、墓地いっぱいに木霊する。
ザンの話の面白さは一級品だった。そんな彼の話を聞いて、エレイサスは声を上げて笑った。
本当に、久しぶりに笑った。
心の底から笑ったと思う。

日はいつの間にか西へ傾いていて、会話が時間を忘れ去れるという事は、こういうことなのかと、実感させてくれる。
やがて再び静まり返る墓地。
その真ん中。
夕日が照らす彼ら顔は、どこか引き締まって見えた。
「それでお前は昔を…思い出していたんだな」
ザンはエレイサスの傍に寄り、そこでしゃがみこんでから語りかけた。
「まぁね」
エレイサスは簡潔に答える。
「僕にとってはとても楽しくて、大切な思い出さ」
懐かしむように、エレイサスは言う。
そして続ける。
「思い出は忘れたくない。けれど…あの日は、忘れたい日でもあったかな」
「あの日?……ああ、今日、か」
そう。今日の事。
そして「あの日」の事。
「ああ。悔やんでも悔やみきれない、後悔の日。…ザンにも、これを機に話しておこうと思う」
少しばかり僕の懺悔に、付き合ってくれ。エレイサスは付け足した。
彼は目を閉じる。
「狩りから戻る途中、フランは僕を迎えに来ていたんだ。野性のモンスターがうろうろしている中で、彼女は迎えに来ていた」
複雑な面持ちで彼は話す。
「本当に嫌な光景だったよ。茂みから一頭のイーオスが現れて、フランへ襲い掛かった。もちろん僕は全力で走ったよ。でも、間に合わなかった」
自嘲気味に、エレイサスは言った。
紅い身体に斑に描かれた、黒い斑点模様。

毒々しい紫の、喉元の毒袋。
毒の大蜥蜴、イーオス。
「すぐにイーオスを倒して、解毒薬を飲ませたけど。彼女の病弱な身体は…無理をしていた分、弱っていたんだね。毒の回りに、解毒が追いつかなかった。フランの容態が悪くなってゆくのが、僕には手に取るように分かった。それが嫌だった」
彼がイーオスを一蹴したのは言うまでもない。そして彼が……彼女を助けられなかったというのも、おのずと分かる。
しかしどことなく、エレイサスの表情は暗くはないと――少なくともザンにはそう見えるのだ。
「そんな状況で、彼女はこう言ったんだ」
そう言って、エレイサスは再び話し始めた。

君が望んだ”生きること”

静けさが広がる闇夜に、紅き小型肉食竜イーオスの断末魔が木霊する。静寂の中に残されたのは、一人倒れた女性と一人の狩人だった。
「フラン!」
エレイサスは全速力で倒れているフランの元へ向かった。
抱き上げ、彼女を見る。フランは右肩を噛まれていた――毒を持つ鳥竜種、イーオスに。
フランはぐったりとしている。彼女は、イーオスの毒におかされているのだ。
傷口からの出血はともかく、毒は危険すぎる。
特に、彼女にとっては。
「…くそ、どこだ!」
ポーチの中を弄り、解毒薬を探す。見つけ、急いで取り出し手にとって、蓋を開けた。中身を傷口に流し、次いでフランに飲ませる。
彼女と目が合う。
「あ」
か細い声で彼女は言った。

エレイサスは大きく、口を開く。
「どうして外へ出ていたんだ！危ないって言っていたじゃないか！」
思わず怒鳴ってしまう。
その人が大切ゆえの、怒り。
「良かった…また会えた」
フランは、エレイサスを確認するとそう言った。どうやら、意識が薄れているようだ。
「私、いつも待っていたのよ、あなたがここへ帰ってくるのを」
こんな状況であっても。
綺麗な笑顔を、彼女は作った。
それを見てしまったら、もう、怒りなど消えてしまう。
「心配していた。エレイサスが狩りに出るたびに、気が休まらなかったわ」
――そんな言葉、場違いにも程があるだろう。今、自分のおかれている状況を考えて欲しい。
エレイサスはどうしようもない気持ちになった。
だが、彼女を責めることは出来ない。
今、こうして自分といられる時間も、たとえそれが危機迫る状況であったとしても、彼女にとっては幸福なひとときなのだと、分かっているから。
むしろ、責められるべきなのは自分の方だ。
知っていたことを、自分は知らないフリをしていたのだから。
「…何も出来なくて、ごめん」
エレイサスは謝った。
「何も出来ないなんて、そんな悲しいことを言わないで。お願い」
彼女のその優しさが、逆に痛みに変わってゆく。途方もない罪悪感が、エレイサスの胸を打つ。
「…聞いてくれる？」
か細い声で、優しげに彼女は言った。
「私はね……もう、長くなかったの」

身体が弱いから、病気にもかかりやすいから。彼女は以前、言っていた。
そのときからおそらく彼女は――患っていたのだ。
「黙っていてごめんなさい。どうしても…言えなかった」
素直に。フランはエレイサスに謝った。
何も言えない。言い返せない。
そんなことは、いい。エレイサスはうつむいて、絶望的な顔をする。
「だから、エレイサスと会うたび、話すたびに、好きになるたびに、焦りを感じていた。でも、それから逃げているばかりじゃ駄目なんだよね。だからこうしてエレイサスに…会いに来た」
「だからって…」
「ええ」
エレイサスの言葉を、フランは遮る。
「危ないのは承知の上だった。でも、私には時間が…無かった。終わりのときが、すぐ先にあった……たまたま今日が、そういう日だっただけなの」
――それは私が選んだことだから、あなたが私に責任を感じることはないの。そうフランは言う。
「そんな悲しいこと、言わないでくれ…！」
もう終わりみたいな、そんなどうしようもないことを…伝えないでくれ。
彼女を抱き締める腕に、思わず力が入る。エレイサスは篭手を外した生身の右手で、フランの手をぎゅっと握った。彼女はそれに驚いたようで、一瞬、言葉に詰まる。
「だってエレイサス、こうでもしないと、気付いてくれないでしょ？私の気持ちに」
私の気持ちを少しはくんでよ。と、彼女は言った。滅多に我侭など言わない彼女が。
「でも、指輪を貰ったときは嬉しかったかな。気付いてくれていた？私、本当に嬉しかったんだよ。それこそ、生まれてきて一番目に嬉しいくらいだったんだよ…わかる？」

彼女は言う。ポロポロと、大粒の涙を零しながら。
「分かるよ。分かる。あんな笑顔を見せられたら、いくら僕だって分かるよ」
エレイサスが言うと、フランは笑った。
痛いはずなのに、苦しいはずなのに。
「だからエレイサスは、何も出来ていないなんて事は無い。私の幸せな記憶に、なったのだから。それでもう、凄いことをしたのよ？少なくとも、私にしてみれ…ぁ、ぅあ」
フランは苦しそうにもがく。解毒薬の効果より早く、毒が回っているのだ。
そんな彼女を、見ていられなかった。
「……死なないでくれ！頼むから、生きてくれ！僕の傍にいてくれ！」
たまらず、本当の気持ちを吐き出すエレイサス。
「私だって…出来ることなら、そう…したい」
フランは弱々しく言う。
誰よりも強い意志を抱きながら。
「死にたくない。生きたい。生きていたい。あなたと生きたい。ずっと先まで一緒にいたい。……大切なあなたの、隣にいて、お話をしていたい。もっともっと、いろんな話をして、笑って…いたい……！」
必死に失いつつある意識を繋ぎとめながら、彼女は悲しげな顔で、自身の願いを次々と口に出してゆく。
それが叶えられないものと分かっているから……やりきれないのだろう。フランは絶望的な顔をしていた。
そんな中でも、彼女は強く、
「エレイサス…残された大切な時間を精一杯に生きて。あなたはあなたの誇りを持って生きて。……わたしからの、お願い…！」
懇願する様に言った。
残された力を振り絞って、涙を流しながら、フランはそう言った。
「約束…してくれる？」

おそらくこれは、彼女自身の願いであったのだと思う。生きられる期間が短く定められた自分からの、これからを生きられる人への――託したかった切なる願い。

「ああ…！」

了承する以外に選択肢などあるものか。

「…良かった。じゃあ……さようなら」

嫌だ。

さようならなんて、言わないでくれ。

そんならしくない言葉、言わないでくれ。

彼女は今までに一番多く、ものを語った。まるで、残された時間を無駄にしないように。

――それが、酷く悲しかった。

ガクン、と一瞬で重みを増した彼女の身体を――受け止める。それからまるで、氷を抱きしめているような冷たい感触が、掌を通して伝わってきた。

彼女の寝顔は安らかで、微笑んでいる。

頬には流れた涙の痕がくっきり残っていた。

エレイサスは事実を受け止めきれずに、その場にいた。

だが、それも長くは続かなかった。事実から逃れること。自分を欺き続けることなど、出来ない。

――ああ、だめだ。

白すぎる手は、あまりにも冷たい。

彼女はもう、いないんだ。ここにいて、もう世界中のどこにもいない。

命は、どうしてこんなにも脆いものなのだろう。

ああ、嫌だ。

彼女の死を把握できた頃には、涙が溢れ出して、頬を伝っていた。

その後はとにかく、泣いた。

涙がかれてしまうのではないかというほどに、泣いた。

後悔と、悲しみと、痛みと。

それらが混ざり合う心境の中で、彼は泣き続けた。

「これが、あの日」
エレイサスは言い終えて、目を開いた。
「……」
ザンは言葉を失っていた。
フランもエレイサスも、どちらが悪いというわけではない。
そして、どちらが良かったとも言い切れない。
例えそれが分かっていても、ザンは口を開かない。開かないのではなく、開けない。
彼は少なくとも、このような状況には遭遇したことがない。単純に彼は、自分の「立場」から発言できないのだ――このような、消えない痛みを伴う過去に対して、かける言葉が見つからないのだ。
「昔。僕は分からなかった。愛したいその人に、何をしてあげられるのか、何をしてあげればいいのか分からなかった…本当に、ダメだったんだ、僕は」
ただ傍にいてあげるだけでよかったんだ。と、エレイサスは言う。
しかし、そのことに気が付いても、愛する人を失った後では意味がなかったのかもしれない。
だが皮肉なことに。
それが後々分かったところで、もう何も戻らない。
「あの時は、どうして何時も傍にいてやらなかったのだろうって。心配をかけっぱなしだった自分が、してあげられることはこれくらいだと、気が付いていたじゃないか。そう後悔したんだ」
「でも」
エレイサスは首から下げた銀のペンダントを見る。
「自分を責めること……それはフランを裏切ることになるから。フランは、自分の分も誇りを持って生きて欲しい、そう僕に願ったのだから。自分を責めることを、僕は止めた」
彼にとって、それは苦渋の選択ではあったという。
自分を責め、十字架を背負っていきてゆくのか。
自分を責めず、誇りを持って生きてゆくのか。

前者を取るべきだと、エレイサスは思った。現に、彼はそうしようとした。そうすることで、傷を負うことで、心の痛みを和らげようとした。

「十字架を背負いながら、人は誇れるわけがない」と。

本来ならそう考えていただろう――あの時、彼女の言葉を聞くまでは。

エレイサス…残された大切な時間を精一杯に生きて。

あなたはあなたの誇りを持って生きて。

わたしからの、お願い。

後者が彼女の願いだというのなら、彼女が自分に託した願いだというなら――迷うことなく後者を選んだ。

それだけのことだと、彼は言う。

起きてしまったことはどうにもできないけれど。

これからを変えることは、もしかすると出来るのかもしれない。

「僕は果たそうと思う、フランとの約束を。後悔と一緒に、忘れないように。あの約束を果たせるように、僕は生きてゆきたい」

そう言って、エレイサスは話を締めくくる。懺悔の最後に、希望の言葉を残して。

「ザン。お墓参り、ありがとう。うれしいよ」

エレイサスは言った。

「いや、寄ったついでに何かしてやれないかと思ってさ。まぁせいぜい、俺が出来ることはこれくらいだけども。…当人の思いに比べれば、俺がしていることはほんの他人事さ」

「それでも、ありがとう」

エレイサスは続けて言った。

「…ああそうだ。エレイサス。お前、まだ独りで狩りをしているんだよな」

ふとザンが訊くと、エレイサスは「まあ」と、頷く。

「昔は時たま、組むこともあったけれど。今は無いな」

「そうか。でもまぁ相変わらずといったところだな」

ソロハンター、エレイサス・アーク。

「そうだね…時々思うんだ。僕は一体何のためにこうやって今も狩りを続けているのだろうってね。ハンターじゃなくても、生きてゆくことは出来るし、誇りを持ちながら生きることも出来る。彼女との約束はそれで果たせるのにね」
唐突な質問だった。
「ん?……いやいや。そんなもん、お前にはまだ、ハンターとしての信念が残っているからだろ?」
ザンはその質問に難なく答える。
「ほら、目標とかさ」
ザンは言った。
「目標か」
そう。
ハンター達、彼らは自らの目的を持ち、それに向かって足を進めてゆく。
世に名を残そうと高みを目指す者。
仲間と共に生き、それぞれの成長を喜び合う者達。
己の腕を磨くため、さらなる強敵に立ち向かう者。
貧しい日常生活を養うために、糧を得ようと日々努力する者。
その種類は様々だ。だが同じことが言える。
それは「このような様々な目的が、夢が、彼等を支えているのかもしれない」と言う事。
「ああ、そうか」
エレイサスは微笑む。
何だ、簡単だったじゃないか。と彼は呟いた。
今や淡くもなってしまった過去に、そっと意識を投じる。
自分が目指したもの、目指したこと。
思ってみれば、別格他人に訊くでもないことだった。いやただ、確認したかっただけなのかもしれない、と。
空という約束を思い起こしながら、彼はそんなことを考えるのだった。
「なんか可笑しいな。自分で思っていたことなのに不思議なんだけ

ど、なんか、ずっと忘れていた感じがする」
納得したように、エレイサスは頷いた。
「まぁ…人事に聞こえるかもしれないが…あまりクヨクヨしてちゃ駄目だぜ。フランはお前に誇りを持てって、そう言ったのだろう？だったらその言葉通り、素直に胸を張って生きていけよ。十字架なんて、どこかに置いていけ」
ザンはそう言った。彼は素性を隠さない性格なので、この言葉は本心だということが分かる。それがなにより、頼もしい。
「そうだね。お前の言葉は、昔から励みになる。ありがとうと礼を言わせてもらうよ」
エレイサスはにっこり笑って御礼の言葉を述べる。
「あ？あぁ。そりゃどうも」
ザンは首をかしげながら答えた。どうやら礼を言われる理由（わけ）が分からない…というよりも自分の前言を失言だと思っているらしい。
「それで、あのな。凄く切り出しにくいんだけど…」
ザンがなにやら場違いな話題を振ろうとしているのは、彼の落ち着きの無い仕草からして察すれば分かる。
「大丈夫。お前のいったように、僕はもうクヨクヨなんてしていないし、しない。十字架だって、ここに置いてゆくから」
エレイサスは言った。彼の表情には切迫したものは見えず、むしろ安堵の色さえうかがえる。それを見て、「彼は嘘を言っていない」と、ザンは確信した。
そして、その上で彼は口を開く。
「そっ……か。じゃあ…言うぜ。お前に、折入って頼み事があるんだ」
ザンは今までの雰囲気から一転、きびすを返すように切り出した。声色も、何と無くだが変わった気がする。仕事モードといった感じだ。
「あの塔へ上ってみないか？」
そう言いながら彼は指で塔を示す。向こうに小さくだが、小さな塔

がそびえている。エレイサスはそれを目で追わずとも、分かった。
「あの塔か…」
あの塔、それはあの丘から良く見える、海上の塔――といっても、実際は向こうの島の上に立っている。その幻想的な建造物は、人の好奇心をかきたてる何かがあるのはまちがいない。
エレイサスも一度は上ってみたい、とも思った。しかし、ザンはなぜ「頼み」と言ったのだろうか。それがわからない。行くだけならば、「頼み」というほどでもないというのに。
「まあ、行って見たいとは思っていたけども」
エレイサスは答えた。
「そうか。ならいい」
ザンは続ける。
「どうも、あの塔には、見たこともないような飛竜が棲んでいるらしいんだ」
「飛竜が？」
意外だな、とエレイサスは素直に思った。
「まあ、街の学者が言っていた話だがな。といっても、正確性には欠けないぜ？」
なにか、そう言い切れる証拠があるのだろうか。強気なザンを見て、エレイサスはつくづくそう感じる。
「随分と自身ありげだね」
「ふふん」
ザンは鼻を鳴らす。
「その学者だけれども。そいつはもともとこの町にいたらしくて、この地方の鉱石とか地形を研究していたらしいんだ。調査済みってワケさ」
随分、その学者と仲がいいのだな。エレイサスは思った。
「それで信憑性が高いってわけかね」
そして納得する。
「この前、その学者と話をしていたら、この町の話題になってな。談話が進むうちにそいつから『調査してきて欲しい』と、俺に依頼して

きたんだ。それで、俺は調査隊の一人…と言っても俺だけなんだが、派遣されてきた」
「なるほど、そういうことだったのか」
用とはこのことであったのか。エレイサスは頷く。
「そこで、お前にお供を頼みたいと思ってな…頼めるか？」
「僕？」
エレイサスは困った。
ザンが任されたのは大方、ギルドによる正式な調査ともいっても
いい。それに「学者」ということは、王都書士隊が絡んでいる依頼な
のかも知れない。だとすると、重要な依頼であることは間違いなさそ
うだ。
「そんな…確かに魅力的だけども…でも大事な仕事だろう？僕なん
かでいいのか？もっと適任の人がいるんじゃないかな」
エレイサスは肩を竦めて、首を横に振った。
「おい！それでいいのか!?」
すかさずザンが突っ込む。
痛いくらいに突っ込む。
「な、なにぃ…!?」
エレイサスは驚いて、思わず後退する。
「興味があるんだろ？だから誘うんだよ、俺は。それにギルドも、仲
間は四人までなら現地で集めてもかまわないって言っていたんだぜ」
四人まで、か。
ハンターの慣わしだな。とエレイサスは思った。
「そっか…じゃあ、頼まれようかな」
「そうそう。それでいいのさ、それで」
ザンの説得にエレイサスはしぶしぶ頷いた。
「ところで、どんな飛竜がいるんだい？」
エレイサスは問う。
飛竜の種族を知ることは重要なことだった。種族が分かれば、少な
くとも相応の対処法も練れるし、道具もまた、それ相応のものを用意
できる。だから今回のように未知なる相手を狩る場合、いやどんな時

であっても、見通しを立てることは人間にとって大きなアドバンテージなのだ。
しかし彼、ザンは。
「ははは、そこまではわからん」
素っ気無い答えを、至って自然に返してくれた。
「下調べは…していないのかね…」
エレイサスは肩を落としながら呟く。
「まぁな。だからつまり、それを確かめに行くのが俺たちって事だよ」
ザンは元から決まっていたかのように話をまとめた。全く、学者や研究者の出す依頼は何時もこういったようにむちゃくちゃなものである。
「…まぁ、わかったよ」
「よし。詳しくは帰り道にでも話そう。明日出発でも、問題ないな？」
「うん。大丈夫だよ」
じゃあ…そろそろ戻ろうか。そうエレイサスが持ちかけると、ザンは頷いてからエレイサスに背を向けた。
「…頑張っていこうぜ」
夕日に向かいながら、ザンは背中で言った。
「うん」
やがて、二人は墓石に背を向けた。
西に煌く太陽は、二人の長い人影を地に映し出す。
緑の木々に囲まれた墓石達の一つの傍、二人の想い出に捧げられた白い花。
それが仄かな赤い陽光に照らされ、淡く輝いていた。

かの地へ赴く狩人二人

翌日の早朝。まだ朝早く、目覚めている人もごく僅かであろう町の中。一軒の家の一つの部屋の中から、鈍い金属音だけがどこか誇らしげに、響いてきていた。

エレイサスは狩りの支度をしていた。

今は、鎧の下に着る鎖帷子を着込んでいる最中である。

彼は今まで殆どの狩りは一人でこなしてきた。討伐したワイバーンは大怪鳥、毒怪鳥、岩竜、水竜、火竜と、どれもこれも一筋縄にはいかなかったが、この地で見られる全ての種類を狩った。

だが、今日の狩り。それは、「いつも」と違う。

久しく行っていなかった多人数狩猟（パーティハント）での狩り。

だが、不思議と不安はない。唐突に持ちかけられたこの依頼にも、自分は拒むこともなく、むしろ快く承った。

全く持って不思議だったと思う。

そして今、自分は自信すら感じられるのだ。今、湧き出て自分を突き動かしているものは、心の奥底に眠っていた何か特別な感情…心情。いわば狩人としての「信念」というものなのだろうか。エレイサスはそんなことを思いながらも、身支度を進めるのだった。

ガシャ。

鈍い金属音が鳴る。エレイサスは雄火竜リオレウスの素材から製作したグリーヴを履く。そして次いで手回しよく、胴、腕、腰の順に〈レウスシリーズ〉を装着してゆく。

彼の鎧は、彼の軌跡そのものを物語っているようなものであった。

鎧は新たな狩りの再、何度も壊して何度も直して、その繰り返しだった。

その過程で生まれたのが今のものだ。彼の鎧は市販の物とは少々造りが変わっている。右手の篭手が通常よりも大きめに作られており、特異な形状をしていた。

さらに胴鎧の右肩も変わった形状をとっており、左と比べると少々

アンバランスさを感じさせる。
しかし、その鎧にはちゃんと意味があった。
「よろしく頼むよ、ミラージュ」
エレイサスの言葉の先にあるもの――それは共に歴戦をくぐりぬけて来た友のような存在。
〈竜輝槍ミラージュ〉世界に一つだけ、彼だけの槍。唯一無二の彼の右腕。
白と銀を主とした美しい容姿の槍に、同じく銀と白の盾。基礎となる槍〈バベル〉に、この地方でのみ採取可能とされている貴重な鉱石をふんだんに使い、強化と改良を加え、完成させたもの。完全にエレイサスのオリジナルである。
白く光り輝く鉱石は属性に対しての伝道力に優れているが、彼の槍の場合は属性を搭載していない。そのかわり、鉱石自体の純度を高めてある。その硬度と貫通力は他の武器を寄せ付けないほどの業物だ。
槍の名は鉱石の別名（あだな）から来ている。槍自体、目立った装飾も施してはいないが、逆にそれがどこからか美麗さをかもし出し、盾と槍の形状から、どこか幻想的なイメージを連想させる。
エレイサスが槍を持ち上げると、風の音のような優しい音をミラージュは奏でた。鋭く天を突く塔のような槍身が窓から差し込む日光を反射させ、白金の輝きを放つ。
エレイサスはそのままミラージュを体に引き寄せて固定する。すると、彼のレウスメイルの右肩、右篭手の形状がピタリとミラージュの凹凸に固定された。
この鎧のアンバランスな形状は槍を安定させ、攻撃を重くするためのもの。
「はっ！」
一突。テーブルと椅子の間の空気を鋭く裂く、矛先。
「よし」
エレイサスは気合を入れ、ミラージュを背中にしっかりと固定する。ずしりと背に重みがのしかかるが、それが確かに自分の生きている証を物語っていて、また、嬉しさでもあった。

ヘルムを被る。視野確保の為、面貌はあげたままだ。そこから覗く青い瞳は、海のように澄んでいる。
まるで、彼の今の心境を表しているかのように。
「準備は出来たか？エレイサス」
どうやら、迎えが来たらしい。声に導かれるように、エレイサスは近場の戸を開いた。
「あれ…」
見回してみる。だが、その姿が見当たらない。
「おう。こっちだぜ」
吹き抜けの窓から首を突き出して、声がした方向を見る。玄関の方だった。武器であるヘビィボウガンを地面に置いて、それに寄りかかっているザンが居た。彼は全身を黒い金属鎧に包み、腰周りに多種の弾丸を装備、背中には膨らんだ革の鞄を背負っている。完全武装だった。
「ようっ」
片手を挙げ挨拶するザン。
「おはよう」とエレイサスは答える。
「自信満々だね」
「ふふん。まぁな」
自信に満ち溢れた彼の姿に、エレイサスは安心した。どうやら、心配は無いらしい。
もちろん自分も、だが。
「おまたせ」
やがて扉が開き、赤い鎧の男が姿を現す。
「準備完了。万全だよ」
「おう、それはいい。んじゃあ、出発しようか！」
二人は歩き出した。
「久々だけれど、よろしく頼むよ」
「ああ。こちらこそ、頼むぜ」
お互いにそう言い合い、
そして、彼らの狩りが始まった。

空は雲ひとつ無い澄み渡った青。それは彼らを見守るかのように、優しい微笑を浮かべていた。

離島までは結構な距離があった。ザンによると、あの場所は潮の満ち引き――潮が引いた時に行けるらしい…。イマイチ信じがたい話だが、今はそれを信じるほか無い。

そんな心境の中、エレイサスは確かに見たのだ。

青い海の中の「道」を。

「…道が出来ているね…うっすらだけど、海面に近づくとわかるよ」

海面に寄り、エレイサスは言う。

「信じて無かったろう?全く…」

ザンは肩をすくめ半ば呆れたように言う。

普段は行けないと思っていた離島。だが、現在はザンの言ったとおり引き潮で、海岸からうっすらと、一本道が出来上がっていた。

その道は…エレイサスは海中を覗き込む。この道は、昔に滅びた都市なのか否か…今は海底に沈んだ遺跡となっているのだが、その一部なのだと思う。もしかするとあの塔は、かつて都市であったここが沈んだ際、唯一地表に残ったものなのかもしれない。

「でも、少々危なっかしい気もするね」

エレイサスがそういうと、ザンは直ぐに遺跡の上に乗って、歩いていった。

「大丈夫さ。ほら!この通り!確りしてるだろう!」

小さな水しぶきが宙を舞う。

ザンは遺跡を踏んで、踏んで、そしておまけに蹴ってみせた。いや、やりすぎているとも流石に思うけれど。エレイサスは苦笑する。

とにかく、彼の言うとおり、その「道」は揺らぐ様子は無かった。

「まあ俺は泳ぎも得意だから、泳いで行けるけどな」

「鎧の重さがあるから泳げないと思うよ…それ重そうだし」

エレイサスのもっともな答えはザンの肩を落とさせた。

「そうか…こんな秘密がこの町には…」

エレイサスはしみじみとした口調で呟く。

「それより、もたもたしてないで今のうちに渡ろう」
確かに海の気まぐれで潮は変わる。わたっている途中に波にさらわれて海の藻屑になるのはごめんだ。ここはザンの言葉が賢明だろう。そうエレイサスは考え、応えの代わりに深くうなずく。
そうして二人は島へ駆け出した。
今、二人は荷物を背負っており、その中身は狩りに使用する道具など多く収納されていた。加えて、それぞれの鎧、武器、それらを合計した重量は決して軽くはない。
むしろ、重い。
ザンの武器である大型銃、ヘビィボウガンは結構な重量があり、さらに撃ち出す弾を持ち運んでいるため相当な重さがかかる。同じくエレイサスも接近武器最大の重量を誇るランス、及び盾を背負っているため、その総計重量はザンのそれを上回っている。
だが、彼らはハンター。生きるか死ぬか、狩るか狩られるか。こんなことで弱音を吐いていられない。
足を止めたら終わり、だから止まらない。
そうやって彼らは今日まで生き抜いてきた。
ザァ。
一際大きな波が音を立て、派手に水飛沫を上げた。
その波が消えると、その向こう側には座り込む二人の姿があった。
途中、不安定な砂の足場に足を取られながらも、二人は無事離れ小島に到着した。今立っている足場は砂ではなく、確りとした硬い岩地だった。やはり遺跡の一部の捉えるのが、筋というわけか。
「つかれた…スタミナ切れだ」
「そうだね…意外と遠かった…」
島に着くや否や、二人は気の抜けた声を上げた。だが、その眼にはやる気の一片も欠けてはいない。すぐさま飛び起きて、前を見た。
「――って、でかっ！」
彼らの目の前には、遺跡、巨大建造物が佇んでいた。ザンが驚くのも無理もない。
「でかいだけではないようだね。何より……高い」

見上げるだけで空と面（かお）が平行になりそうになるほどに、巨大な塔であった。
エレイサスは建物物に寄っていく。これが作られてからどれだけの時間がたったのだろうか、相当古いものだと伺える。しかし外見に反して、建物は脆くはないようだ。風化している部分はあるが、内は案外確りしている。
所々崩れた壁の隙間からは無造作に生えた緑が顔をのぞかせている。建物への侵食の心配はあったが、どうやら大丈夫そうだ。
「見たところ生き物は……いそうだ」
エレイサスは一通り見渡した上の感想を述べた。
ここに生態系が完成しているとことは、ここへ至るまでの道中、ザンから聞いた情報から証明済み。まぁ少なくとも、真実であるならばの話であるが。
仮に真実であるならば、
草を食べる虫や草食竜たち。
それを食す小型肉食竜たち。
そしてそれらを食す、「飛竜」が棲んでいてもなんらおかしくはない。
「エレイサス」
呼ばれて、エレイサスは振りかえる。
ザンの顔は引き締まっていた。眼差しは強く、真剣そのものと言ってもいい。
「ここから先、なにが起こるかわからない。最悪、今までの経験が通用しないかもしれない」
「ああ。それは十分、承知している」
エレイサスは深く頷いた。
そして悟る。
「引き返すなら、今のうちだぜ」
重ねて、ザンは言う。
彼は、いざ現地に着いて不安を感じ始め、引き返そうとする――そんな臆病風に吹かれたわけではない。自分がここで嫌だと言えば、

彼はそれで納得して一人で上って行くだろう。
　彼はおそらく、ここで最終確認を行おうとしているのだろう。半強制的に連れてきた人間に、後悔をさせないように。
　いずれにせよそんな気遣いは、自分が依頼を承諾した時点で、限りなく無効となってしまっているのだが。
　エレイサスは口を開く。
「もちろん、そんなつもりはないよ。というより、ここまで来ておいて引き返せというほうが難しいよね」
「よし、決まりだな」
　ザンは「やはり」といった風に笑った。
「さて。んじゃ…潜入調査開始といくか」
　ブンブンと腕を回すザン。
「まず…入り口を探すことが重要、と学者は言うだろうなぁ」
　だが、それはあくまで学者視点。そんなルールは彼らに必要は無い。
　なぜなら、彼らはハンター。野を駆け、山を登り、谷を降る。道具あれば利用し、道具なければ自らの力で道を切り開く。
　ただ、それだけのことだ。
「ツタが生えているぜ、エレイサス。早速登ろうか」
　塔の壁には、太く丈夫そうなツタが多く生えていた。ザンはこれを手綱として使い、上へ登ろうというのだ。
「僕が先に登るよ」
　そう切り出したエレイサスは、颯爽とツタにつかまった。
　エレイサスがツタを使い上へ登っていく。これだけの重装備のエレイサスでも、このツタはびくともしなかった。
　確りとしている。
　エレイサスはさらに登り、登りきってザンに合図を出した。
「大丈夫みたいだ」
「おっけー。じゃあ俺ものぼるぜ」
　ザンも登ってくる。
　こうして、彼らはこの塔の中へ入る。

そして二人はそこで、その先に広がる光景を見た。
『おぉ……』
ほぼ同時に声を上げた。
開けた平地に、草食竜〈アプトノス〉がいたのだ。温厚な性格な彼らは、主に食用とされている。警戒心は薄く、エレイサスたちが近寄っても逃げることはなく、生い茂っている青草を休まずに食んでいる。
生態系の完成は、ここにもありえる。そんなことを感じさせてくれる事実であろう。
「いこうか」
今は食料に困っているというわけでは無い。エレイサスはそのまま素通りする。
「ああ、そうだな」
ザンも賛同してその後を追う。
――無駄な狩りはしない。これはハンターとしての心得だ。無駄な狩りはただの虐殺となり、その尊厳を失わせてしまう。大地への感謝、命への敬意を持ってこそ、はじめてハンター、狩る側になれる。
しかし、誰かが生きているということは、間接的に命を奪っているということにもなる。
だがしかし厳しいながらも、それが自然の掟、理であるとエレイサスは考えていた。死を選ぶことは、自分の存在で命を失った者への罪。
生きることに誇りを持たなければならない。
彼女も、そう言っていた。
石造りの道をしばらく進むと、再び開けた場所へ出た。
「あれ」
エレイサスが指差して言う。
先に階段のような物…いや階段が見える。上階へ進むためのものだろう。
「…こりゃあ螺旋階段だな。そういや学者が、望遠鏡で見たとか言っていたな」

彼の言葉通り、その階段は螺旋状になっていた。この塔はフロア毎に別れていて、階段で上階へ行くらしい。
「はぁ…こりゃ気が重くなってしまうな」
ザンは〝へにゃり〟と、力が抜けたように足腰の関節を屈めた。もう一度、先ほどの締まった表情を見せて欲しいとエレイサスは思う。
「早速へばってどうするのさ」
エレイサスはザンに語りかける。
「うそ、うそ」
ザンはお茶目に言う。エレイサスはため息をついて「全く」と腕を組んだが、すぐに解いて「まぁいいか」と呟く。
こんなやり取りも、悪くは無い。
「いくか」
「いこう」
そうして二人は未知の遺跡中を進んでゆく。
大きな塔の中、
小さな狩人達の背中は、大きい。

それぞれの生命（いのち）の色を

「こりゃあ決まりだな…エレイサス」
ザンが実感の籠った声で言う。向かい側のエレイサスはそれに頷き、もう一度足元の手掛かりを見た。
「ああ、やっぱりここにもいたね」
二人が塔を登り始めてから二日が経った。
肉食モンスターが見当たらない場所を探し、交代で見張って野宿した。食料は近場のアプトノスを狩ってその生肉を焼き、それを食べた。
特に問題も発生せず、安定したペースで二日は過ぎた。
狩りには主に、指定された制限時間がある。しかし今回はそれが無い。ゆえに時間に追われることは無かったが、だからといってのんびりしてはいられなかった。
狩場では当然、通常の日常と違って疲労がたまりやすい。特に、精神面で。
時間がたてば、疲労がたまれば、おのずと張り詰めた緊張感も緩んでくる。ここでは何が起きるか分からないから、それは致命的だ。
ここは未知の場所だった。塔は縦だけでなく横にも広く、迷うこともしばしばあった。どのような生物がいるのかなどが記された書――せめて地図があって、道が定まっていれば一日ほどで上れたのかもしれない。が、そんなものは一切無かったので、できない。
今エレイサス達の居る場所は高かった。窓から顔を出して外を見ると、もといたところが、本当に小さく見える。また、上を見上げると、最上階を確認することができた。
一つ、確信できたことがある。それは唯一情報として耳に入っていること。そして、目標でもある。
「飛竜」の存在である。
登りの最中、彼等は鳥竜種、小型肉食竜に何度か出くわした。彼らは適応力が強いのか、ここにも生息しているようである。

誰彼構わず襲い掛かる危険な性格を持ち、しかも俊敏で狡猾であるから侮れない。出会えば当然、戦闘になる。逃げ場の少ない階段内で、しかも上階を目指すならば倒して進むしかない。

行く手を阻むものを倒しながら…彼らはこの未知の遺跡を進んできた。

それが、だ。今見えている地面の上には、ザンとエレイサスどちらかが手を加える事も無く、数頭が絶命して転がっている。

近辺には巨大な足跡が見られた。それに重ね小型肉食竜はどれも切り裂かれるか黒焦げか、どちらかの形で亡骸となっている。

また、階の天井や床に大きな穴が開いていた。それは丁度、飛竜が通り抜けることが出来るくらいの大きさであった。

これらはここには何らかの「飛竜」が存在するという、その裏付けになった。その確信は、それまで特に変わった事の無い平凡な塔登りの中で、彼等に少なくない衝撃を与えた。調査目的は「それ」であったにせよ、本来このような事実は信じがたいものであったから。

飛竜の存在の他、おおまかな種類まで判明した。

登っている途中に何度か真っ黒に焼け焦げた草木を見つけた。注目する点は、焼け跡は直線的だったということだ。

まるで奇麗な直線を引いたように大地が焦がされている。こんなことが出来るのは、おそらくあの飛竜。

知っている限りで挙げられる、その可能性を含む飛竜。

雄火竜〈リオレウス〉。

または雌火竜〈リオレイア〉。

火竜とも呼ばれるこの種は、文字通り口から火炎弾を吐き出すことが出来る。その弾道は直線的だ。それに火竜は適応力が高く、様々な地域に分布する事で知られる。更に翼も発達しているので、ここを行き来することも容易い。

「火竜ならば、ここに居てもなんら間違いとはいえない」経験上からはそういった結論に行き着いた。

そしてそれには、二人ともども異議はない。

ただ、「見たこともない」という学者の伝えた言葉だけが、唯一

引っ掛かっているのだが。
「どっちだろうな」
「うーん」
ザンとエレイサスは両者首を捻る。
リオレウスとリオレイアの違いは、色形はよしとして、雌が「地の女王」、雄が「大空の王者」とそれぞれに冠しているその異名にある。行動の違い、という方が分かりやすいだろうか。
「地面に足跡が少ないな。…ってことはリオレウスの可能性が高いってことじゃないか？」
ザンは言う。
雄であるリオレウスは、その巨大な翼を駆使した空中戦を好む。かわって雌のリオレイアは強靭な脚を使って大地を駆けるという、それぞれ対照的な特徴がある。それゆえに、判別も安易だ。
仮にここに棲むのがリオレイアなら、足跡は当然多くつくはず。だが、ここにある足跡は二つだけだ。
飛竜が降り立つとき、その着地の際に付けられたものとわかる。おそらく、ザンの言ったとおりリオレウスのものだ。空中から襲い掛かり、着地した後に残った獲物を火炎で倒したのだろうと、二人は推測を立てる。
しかしそれだけではまだ断定できない。この痕跡を残せるのは、リオレウスだけではない。リオレイアもまた、この痕跡を残すことが可能といえば可能なのだ。
特に今回の例外を含めた場合だと、それは判別の余地がなくなる。
「よほどのことがない限りそうなると思うね。第一、今の時期にリオレイアは活動しない」
エレイサスは言った。
彼の言葉は決め手となる事実だった。それは今が、モンスターたちが命を育む繁殖期であるということだ。
この時期、雌であるリオレイアは子育てで忙しくなり、巣穴に篭り滅多に外には出てこない。子を護るためにだ。そして、巣穴を作る際には、リオレイアは決まって山岳地帯の洞窟や、森の中に露出した岩

場などを好む。それは、どういう理由からかは分からないのだが、そういう決まりなのだ。たぶん、子を育てる都合上、なんらかのメリットがあるのだろう。
この塔は飛竜が子育てをするには、かなり不安定な環境下である気がする。子育ての上でメリットが有るか無いかという点においては、この塔にメリットは無いと思えた。
ならばおそらく、
「雄火竜か…」
ザンは呟く。
結論は一つに行き着いた。
その場にどこか、硬い空気が漂う。
空を制する竜と、地を這い蹲る人。この時点で優劣はついているというのに、相手は空を駆ける事を得意とする雄の火竜なのだから、当然と言えば当然だ。
上級者でも侮れない相手ゆえに、緊張感が生まれる。しかしその緊張感は、大事なものだ――狩りを行うにおいては、絶対不可欠ともいえる、大切な。
ザンはバックパックから弾丸を腰のベルトへ装着した。そしてそれから、ボウガンの機構を何度も、確認した。暴発などの危険性を含むこの武器を、「来るべき時」の為に安全、万全の状態に整備しておくために。
彼は心の準備を整えている…それはまた、エレイサスも同じだ。
「…ランポス系統とご一緒したくはないな」
エレイサスはそう、苦笑いしながら言うのだった。
ザンの言った、「ランポス系統」とは小型肉食竜・鳥竜種を指し示す。それら一頭の強さはそれほどでもない。油断でもしなければ脅威でもない。しかし彼らは力の代わりに数で、群れで狩りを行う習性を持っている。それがハンターにとって厄介であった。というよりも、避けるべきである。
飛竜と共に彼らが現れると、危険が何倍にも増すのだから。
「まあ、そのときはそのときだ」

「そのときって…」
暢気に言うザンに少々呆れるエレイサスであったが、それが彼なりのリラックス方法なのであろうと思った。緊張しすぎることもまた、危険に繋がる。
そもそもザンは、乱戦を許す気などさらさらない男なのだから。やはりあの言葉は、自己暗示というリラックス法なのだろう。
そうして彼に次ぐように、エレイサスは心落ち着かせるべく、深呼吸をした。気持ちを落ち着かせた後は、一歩、そして一歩と先へ歩みだしてゆく。
所々コケの生えた長い階段を進むと、やがて最上階と思わしき場所が見えた。開けた向こう側の景色から、光の束が湧き出ている。どこか、幻想的な光景であった。
その先には何があるのか。着々と近づきつつある真実に、エレイサスは目を細めた。
「さて、どうなっているのか」
ゆっくりと歩きながら、その入り口を通り抜けるエレイサス。
瞬間、彼は風を感じた。
辺りには緑が生い茂り、先を見れば小さな池もある。おそらく雨水が溜まって出来たものだろう。
まるで楽園。
そこは生物が棲める十分な環境になっていたと思う。辺境地だからこそ、このような常識では考えられない場所も生まれたのだろう。人の手に触れられることなく、この景色はこうやって残ってきた。
心安らぐ。
そうしてエレイサスは一瞬、気を緩めてしまった。
――何かが、いる。
途端に背筋に緊張が走り、ただならぬ気配に静かに後ろを振り向く。
見れば、ザンもまた同じ気配に気づいていたようだった。
…グルル…
低い唸り声。

人のものではないその唸り声は、嫌というほど耳に不快感を与える。唸り声は近くなって、気配は更に強くなった。荒い鼻息がはっきりと聞こえる。まるで、もう隣に来ているかのようだ。

（やはり、いたか）

曖昧な気配の「それ」は、そのときを境に明白な実態になった。しかし「それ」は彼らの予想していたものとはあまりに違っていた。

（なんだ？あれは…）

岩石に背を預けるように身を隠していたエレイサスは、己の目を疑った。

筋肉質な脚。

雄々しい巨大な翼。

刺々しいフォルム――シルエット。

それらは確かに、リオレウスなのだが。

雄火竜リオレウスは赤銅色の甲殻や鱗。その中に稀に黒い鱗が混じっている。それがリオレウスの――普通の体色であった。

だが、ここにいるそれは甲殻、鱗ともに黒。さらに通常赤に黒い模様が入っている翼膜は、その模様が見えなくなるくらいに黒く変色している。艶を完全に消したそれの体色の姿はまるで暗闇を具現化しているようであった。

それの放つ圧倒的な威圧感を二人も感じずにはいられなかった。息を呑んで、二人はレウスを窺う。

そのとき、視線を感じたのかレウスの青い目が動き、

こちらを睨んだ。

ゴギャアアアアアァオォン!!!

『ぐおっ！』

大気を震わせる轟音が、咆哮が。辺り全てを一挙に襲う。その振動に思わず二人は耳を塞ぎ、体は竦んでしまった。両者共に必死に体を動かそうとするが、人間が本能的に持つ恐怖からの束縛は、簡単には解けない。

これだけは経験を積んでも克服できない……人の弱みというべきもの。

それでも。
「…ううおおおおお!!」
体の硬直を先に解いたのはエレイサスのほうだった。咆え、自らの気魄で全身の筋肉を無理矢理動かす。前方へ踏み出して、やや体勢を崩した状態のまま進む。数秒経って、それから自由に動けるようになった。
まずい。
束縛を解き、自由になった彼はその眼に更に悪状況を見た。
エレイサスの眼に映る漆黒の王者は、火炎を吐き出す準備をしていた。リオレウスの鼻から、辺りの空気が一気に吸い込まれていく。
――エレイサスは急いだ。
レウスは次の瞬間、首を前方へもたげた。
口の中が眩い光に包まれる。
球状の巨大な紅蓮の塊が、ザンを目掛けて撃ち出されたのだった。
これは通常のレウスの吐くものよりも、はるかに大きな火球であった。まだ硬直が解けていないザンは、逃げることはできない。
「…くそったれ…!」
かすれるような声でザンは呟き……目をつむった。
刹那、目の前で轟音と共に爆発が起きた。身を焦がすような熱風が荒れ吹き、辺りの草木を焦がしてゆく。
ザンは目を丸くして、その光景を見ていた。
煙が徐々にはれてゆき、前に薄っすらと人影が見えた。煙の中には、赤い鎧の男が銀色の盾を構えていた。
ザンは自分が生きていることを実感する。――仲間に護られたのだ。
「…ありがとう、助かったぜ」
彼は感謝して言葉をかける。エレイサスはその言葉に振りかえることはしない。
「宣戦布告、というわけなのか?」
エレイサスは言い放った。それは凛とした声だったが、冷汗は頬に点々として、彼の隠し切れない緊張を物語っている。武器も、構えを

怠っていない。
前方のレウスは、唸り声を上げながらも、その場を動かずにこちらを睨んでいる。まるで「かかってこい」と言っているかのように。
エレイサスは煤けた鎧の表面の汚れをはたき落として、鋭く細めた瞳で真っ直ぐレウスを睨む。
臨戦態勢。
「まったく、たいしたやつだなぁお前は」
冷汗をかきながらもザンは心で彼に称賛の言葉を送る。エレイサスの後姿はまるで歴戦の狩人にも見えた。
「負けてはいられないな」
ザンは表情を引き締める。そして背負っていたヘビィボウガンを展開、銃口を眼中の獲物へと向ける。
「…行くよ」
「了解」
自然界ではあり得ない事なのだが、レウスはまるでこれが勝ち負けのある闘いであるかのように、彼らが身支度を終えるのを待っていた。
やがて、動き出す漆黒。
グルル…
レウスは一つ唸り、こちらの用意が出来たことを悟ったかのようにゆっくりと動き出した。
徐々に速度を増す巨体。
その強靭な足で地を蹴り、エレイサス目掛けて突撃してくる。エレイサスは背を向ける形で、ザンからレウスを引き離すように走り出した。しかしこのままではエレイサスはすぐ追いつかれてしまうだろう。何せ人と竜とでは、体の大きさも脚力の強さも、すべてが違うのだから。
しかし無意味、というわけではない。それには、それ相応の意味がある。
「こい…」
ザンは展開したボウガンのスコープ内をじっと睨む。そこに浮ぶ

十字の標準がそのまま彼の視界となる。引き金に指をかけ機会を待つ。そして、チャンスはすぐにやってきた。距離、弾速、風力、敵の速度。彼のガンナーとしての経験が、感覚が、自身に「撃て」と命令する。

プシュン…。

銃口に取り付けたサイレンサーが消音機能を果たし、発砲時の音を抑える。おかげで、向こうに先読みされず……避けられることもない。

空気を切り裂きながら放たれた弾丸がレウスの頭に直撃する。さらに着弾した弾丸はいくつかの子爆弾になって顔全体を爆風で包み込んだ。

ガンナーは剣士には決して出来ない遠距離攻撃――射程内なら武器を「飛ばす」ことができる。ザンはエレイサスが注意を引いているうちに、その無防備な頭に爆撃をお見舞いしたのだ。

「効いた、か？」

ザンは反動に数歩後ずさりしながらも、心中で必中を確信した。

だが。

確かに最高の距離を計り放った。その一撃はレウスの顔を捉えた筈だった。しかし現状、それはあまりにも無情な結果だった。

「おいおい…こりゃ驚いたな」

彼の放った〈拡散弾〉は直撃の際に爆薬が分散し、広域爆発を起こす強力な爆薬弾。小型とはいえ、爆弾と同じだ。

だが、向こうのレウスはほぼ無傷――見た限りではそう判断できる、それだけであった。だがそれと引き換え、その行動が、向こうの怒りを「引き出してしまった」。

グルルルァァァァ…!!

低い唸り声を上げながら、レウスは地面を筋肉の塊のような脚で掻き、威嚇している。飛竜の中でも知能が高く、自身の存在にプライドを持つ種故の怒りだ。口からは常に火炎がほとばしり、眼は怒りで焦点が合わなくなっているように見える。

だがその間、一瞬だがレウスの動きが止まった。

その隙をエレイサスは逃さなない。間髪いれずレウスに接近し、ミラージュを素早く引き抜いた。そして、渾身の突きを腹に突き出す。
鮮血が噴出し、自身の立っている地面を赤く濡らした。
だが、浅い。
噴き出した鮮血を頭から被りながら尚、エレイサスは攻撃を止めない。勢い良く振り回させる尾を、一瞬で見切り、屈んで避ける。
当たれば鎧ごと叩き潰される一撃。それが身体を掠め、肩の装甲が吹き飛び、宙を舞う。それを気にも留めず、エレイサスは更に踏み込み、少しでも足元が狂えば踏み潰されてしまうであろうという巨大な脚の間を潜り抜け、レウスの背後に回り込んで、素早く胸に上段突きを放つ、渾身の力で。
放たれた突きが捉える箇所は胸部。
一発目は狙いが逸れ、周りの甲殻に弾かれてしまう。四方に火花が散った。弾かれた反動で後ろにのけぞるが、すぐに態勢を立て直す。
尾撃が来た。今度は避けずに、構えた盾でうまく角度をつけ、受け流す。硬い鱗と金属が火花を散らし、それがヘルムにかかるが、気にも留めず彼は続けて突く。
二発目。胸に直撃した矛先。手ごたえは、まだない。
もう一度。
その僅かな隙間をもう一度、突く。胸を守る鱗が四方八方に飛び、傷口から血しぶきがあがる。
巨大な脚が彼を踏み潰さんと地面を蹴ってくる。それを巧みに避け、バックステップで後退し、エレイサスは一旦レウスと距離をとった。
エレイサスは再び突っ込む機会を窺う。出来るだけ相手の背後に回るようにして、レウスの周りを回る。
青い目が、エレイサスを睨んだ。
レウスは跳躍する。翼を使ってではなく、その筋肉質な脚でジャンプしたのだ。一瞬の出来事に、エレイサスは驚き、何が起こったのか把握が出来なかった。
瞬間。物凄い地響きと共に、王が、エレイサスの真正面に降り立つ。

もうその距離は、ゼロとも言えるほどで。
レウスは首をもたげた。
轟音。
地面がそこだけ抉られる。まるでそこだけ「その音」に支配されてしまったような、凄まじい音が鳴り響く。
砕け、弾ける大地。瞬間、そこは火焔に包まれた。レウスは翼をはためかせて宙を舞い、後退する。それとは逆方向、黒煙の尾を引きながら地面を無様に転がるエレイサス。
「ぐっ、あ…！」
寸前で盾を構えたおかげで、直撃は間逃れた。間に合ったのは幸運だったろう。
熱風が鎧の隙間から身を焦がす。何メートル吹き飛ばされたのだろうか。彼は何とか立ち上がった。
同時、左腕に嫌というほどの激痛が走る。
寸前で盾を構えたおかげで、直撃は間逃れた。間に合ったのは幸運だった。
だが。
「これは…まずいな」
痛みは確かにもう…腕が長続きしないことを物語る。
「まだ戦いは始まったばかりだというのに…」
エレイサスはこみあげる不安を口にしながら、レウスへ焦点を合わせた。
見れば、ザンが一人でレウスを引き付けてくれている。だがガンナー故に、彼の防具は剣士用のものよりはるかに脆い。
攻撃を受けた際の、その結果は簡単に予想できてしまう。
彼が簡単にやられるとは考えられないが、その考えをあのレウスに対しても当てはめてしまうことは、あまりにも危険なことだ。
いいや。そもそも「大丈夫である」などといった保証など、狩場にありはしない。
エレイサスは切迫した思いで走り出した。
〈ミラージュ〉を構え、エレイサスは突進攻撃のモーションをとる。

大地を疾走し、みるみるうちにレウスとの距離が縮まってゆく。
狙うは脚。
地面を高速で駆け回る、その機動力を奪うために。
その姿を目に留めたザンは攻撃を止め、再び距離をとった。ザンが所定の位置についた瞬間、エレイサスの突進からの突き出し攻撃がレウスの脚に命中する。火花と血飛沫が交互に舞い、穂先はレウスの脚に切り傷という形でダメージを与えた。
レウスが怯む。
エレイサスはその隙に後ろ側へ回り込み、脚の付け根に二度突き出し攻撃を加える。エレイサスはサイドステップを踏んで回避し、離脱しようと試みるが。
尾による攻撃が来た。
瞬時に盾を構える。
「ぐっ！」
エレイサスは後退した。ガードしたものの、腕には鋭い痛みが走る。直接骨に響いている気がした。
更にレウスはエレイサスと向き合い、その巨大な口で噛み付き攻撃を加える。鋭い牙がずらりと並んだ巨大な口が、標的を飲み込まんと開く。
ミラージュの盾がそれとぶつかり、火花を散らす。だが人間と飛竜だ。力比べの結果は言うまでもない。
エレイサスはその場でひざをつき、体勢を崩してしまう。次にはおそらく追撃が来る。顔を上げてみれば、既にレウスは首をもたげかけていた。
来る。
思わず手で身をかばったエレイサスの前で、先程とは違う音の爆発が起きた。目を開けてみると、レウスが胸元から黒煙を引き、怯んでいる。それから一拍空けて、今度は違う音が辺りに響き渡った。ザンのボウガンが火を噴く。レウスへの追撃だ。
狙うはエレイサスの攻撃した部位、胸部。先程まで弾かれていた銃撃は、今は確かに効いていた。それは強固な甲殻がそこだけ剥がれて

いるためと、ほかにも理由があった。ザンは甲殻にダメージを与えるために、貫通力に優れた〈貫通弾〉を装填、撃ち出していたのだ。
そしてそれを、防御の薄い首から腹にかけて連射する。弾丸はどれも弾かれることなく、次々と肉に突き刺さった。
そして刹那、血を噴く。
「俺なら大丈夫だ。だからここは任せろ」
駆け寄ったザンが、エレイサスの耳元で囁く。自分がレウスと距離を詰め、そして攻撃した理由を、彼は悟っているらしい。
「…ああ、頼んだよ」
エレイサスはそう答えて岩陰に身を隠した。そしてしばらくの間ザンに戦闘を任せ、自然回復を待つことにした。
ザンは攻撃を紙一重で避けつつ、銃弾を撃ち出し、少しずつだが、着実にレウスにダメージを与えている。そしてそれは同時、レウスを焦らせ、翻弄している。それこそ、先ほど攻撃を仕掛けていた標的への追撃を忘れるほど。
だからこそこうして、今、休んでいられるのだ。
「なんてヤツなんだか」
思った以上に手強い相手だと思った。あの追撃といい、標的を狙う精度といい、並みの飛竜では到底できないであろう。並外れた、とこかタイプの違う竜なのだろうか。それとも闘いに熟練した、そんな竜なのか。
いずれにせよ、あの飛竜が相当な業の持ち主であることは間違い。
エレイサスの脳裏に形のない「死」の文字が浮かび上がる。
（駄目だ、そんなことを考えるな……！）
首を振り、嫌な想像を振り切る。
しかし皮肉にも、状況は悪化していた。
ザンが辺りを見回している。レウスを見失ってしまったのだ。
エレイサスは視線を走らせた。
右。
左。
いや上――空だ。

「ザン！上だ！」
思わず槍を置き、駆け出すエレイサス。
間に合わない。
間に合うか――間に合わせてみせる。
「ぐ」
間一髪。エレイサスはザンを突き飛ばし、滑空攻撃は彼等の頭を、ぎりぎり掠めて逸れる。一瞬でも遅かったら、ザンの首がもげていただろう。
レウスは再び上空へ舞い上がっていった。
「危なかった……」
呻き、ザンが起き上がった。そこでザンはやっと彼――エレイサスに助けられたのだと認識する。
「ありがとう、助かった」
「ああ」
刹那。
彼等の真上に巨影が翳った。
あの黒い巨大な。
「しまっ――た」
レウス彼の周りに円を描くように火球を何発も地に吐き出す。
轟音と共に爆撃とも言える火炎弾が地を紅く染めていく。
体勢を崩していたエレイサスは業火にのまれる。
――彼は、悲鳴を上げる余裕もなかった。
「エレイサスッ!!」
黒煙と熱風が交互に荒れ吹く中で、ザンは顔を覆いながら叫んだ。
エレイサスが――やられた。
一人残されたザン。
やがて炎が燃え盛る中で、ゆっくりとこちらを振り返り見据える青い、二つの瞳。それが、とてつもない威圧感となってザンを襲う。
舞い上がる黒い影。ザンは急いでヘビィボウガンを構える。
「くそっ…くらえ!!」
怒号と共に銃口がレウスへと向けられた。ザンは拡散弾を同じ部

位――頭部へと放った。凄まじい反動が彼を後ろに押し込む。たとえ一撃で壊せなくとも、何回も同じ部位を狙えば、地道であろうともそこは当然脆くなる。それは否めない事実だ。ザンはそれを考慮した上で同じ部位へ狙った。

再び弾丸が、空気を切り裂きながらレウスへと向かう。放たれた弾は着弾し、その後激しく炎を上げて爆発する。

だがしかし、奴は彼の予想以上だった。

レウスは自らの翼で爆発を防ぎ、頭部を護ったのだ。防いだ翼の翼膜は焦げているが、とても致命傷とは言い難い。レウスはザンの方を向き、強く咆えた。

咆哮が轟く。

「くそったれ…」

ザンは吐き捨てるように言った。

――先ほどと、まるで形勢が逆転してしまっている。

ザンは焦り始めていた。

レウスの攻撃を避けながら、彼は思った。

この火竜、明らかに戦い慣れしている。恐らくハンターとも幾度と戦っているのだろう。しかし、奴を見て帰って来た者はいない。つまり、奴は目の前に現れた者を全て葬ってきたということになるのか。

その数々の経験が、ここに居る漆黒の王者を作り上げた。

レウスが攻撃に移ろうと飛行体勢をとり始める。筋肉の塊のような脚が一気に太みを増し、王者は禍々しい漆黒のマントのような翼を大きく広げた。

「しまった…!」

ザンは辺りを確認する。いつの間にか、彼の左右は瓦礫と火焔に阻まれていた。火炎は、むやみに吐き出していたのではない、確実に、彼の行く手をふさいでいたのだ。

無言で弾丸を装填する。それは先端が鋭い金属の貫通弾。そして、引き金を引く。反動に構わず、のけぞりながらひたすらレウスの頭部へ弾丸を撃ち続けるザン。

「うおおぉらあああ!!」

銃弾の雨を受け、徐々にリオレウスの頭部がひび割れていき、遂に甲殻が剥がれ飛んだ。
それでもレウスは止まらない。その漆黒の翼を広げ、血の線を宙に引きながら自分へ一直線に向かってくる。
「くっ！」
ザンはボウガンを放り出して、レウスの攻撃…その直前で決死の回避行動を行う。
風を切り裂く音が、耳元でした。
レウスの足爪はザンの擦れ擦れ、鎧を掠めて易々と抉り、通り過ぎていった。
「っつ…」
肩当てが吹き飛んで、流血している。
肩を押さえながら起き上がって、そこでザンは息を呑んだ。
奴が突進してきていたのだ。
行動が早い。
着地後、すぐに旋回したのか。あの勢いを殺すとしたら恐ろしい脚力だ。
「畜生！」
一か八か。ボウガンを急いで拾い、レウスへ向ける。
駄目か。
「目を閉じろぉ!!ザン!!」
ザンはその声に咄嗟的に従う。
刹那、閉じた目からも眩しく感じる光が轟いた。
グオォォン……
短い悲鳴のような声があがり、ザンはおそるおそる目を開くと、向こう側には視界を奪われ、我武者羅に暴れまわる漆黒の王者がいた。
それだけではない、彼の隣には彼が居た。ボロボロで、それでも必死に生きている男が。
「エレイサス…」
ザンは思わず、動揺してしまった。
生きているとは信じていた。だが、その姿があまりに無残だったか

ら。
「何とかうまくいったよ。でも、見たところ奴に同じ手は二度通用しない…。この閃光玉だって次は見切られるに違いない。決めるなら一撃に賭けるしかない。そうだろ?」
エレイサスは冷静に言った。
「お前…」
ザンは思わず声を詰まらせる。鎧は所々砕け、煤けた赤い甲殻と鱗。額から流れ続けている血。裂かれた鎖帷子から覗かせている皮膚は、火傷を負っているに違いない。
それでも彼は狩人としての誇りを、一片たりとも捨ててはいない。まだあきらめていいないのだ。
ザンの眼光が鋭さを増した。
「考えがある。よく聞いてくれ」
エレイサスは声を潜めてザンに語りかける。その顔はまさに真剣そのものであった。ザンはそのまま無言で頷く。
「今、雨降っているだろ」
「あ…気づかなかった。降っているがそれがどうかしたか?」
ザンは気づかなかったが、というよりも気にする暇も無かったのだが、確かに雨が降っていた。
一時的な天気雨だろう。
雨は強い。それこそまだ降り出して間もないというのに、地面が濡れていないところが無いくらいに。
「これを利用する。でもこれはザンにしかできないからな」
それを聞いてザンの表情が引き締まる。エレイサスは引き続き説明する。
「その弾丸と…この辺はザンの方が詳しいだろ?これにこの雨を利用して…それと」
「大体わかった。これだろう?」
ザンはバックパックに入っているある弾丸を指差す。
バックパックはゴム質だった。
絶縁体。

「ああ、その通り。でもタイミングが大事だから」
拡散弾を含め様々な弾丸の連続発射や回避時の衝撃等で、ザンのボウガンは既に悲鳴を上げていた。
なにより、彼ら自身も。
これが最後の賭けだった。
「…了解、任せろ。絶対に成功させる」
託された願いを、ザンは受け入れた。
視界を取り戻したレウスは辺りを舐めるように見回している。あの二匹の獲物は何処へ行ったと、その眼を鋭く狩場へ向けている。
ふとそのとき。レウスの眼中に獲物が現れた。
彼らを見つけると同時、レウスは歓喜にも似た雄叫びを上げる。
エレイサスはレウスの元へ走った。
これ以上の戦闘は危険すぎる。なるべく早く片をつけなければならない。槍を抜き払い、レウスの足元を何度も攻撃する。鋭い爪がギラギラと視界に入り込んでくる。この足踏みに巻き込まれれば、即死する。
恐怖との闘い。
自分との戦い。
「うおおおおおおおぉぉらああ！」
叫ぶ。もう何を叫んでいるか分からないくらいに。
バックステップをした瞬間、丸太のような尻尾が頭の上を通り抜ける。と同時、懐にもぐりこみ、真上に突き出しをお見舞いした。レウスの腹に亀裂が入り、絶叫と共に血が噴出す。
レウスの反撃がくる――避けられない。
咄嗟にガードする。強靭な脚で蹴り飛ばされ、エレイサスはその場から一瞬で吹き飛ばされた。肋骨が何本かまとめて、折れた気もする。
「ぐほっ……！」
転がり、血の塊をゴボリと地面に吐き出す。
――それでもまだ、立ち上がれる。
まだ戦える。

レウスは空高く飛び上がった。その鋭い、獣の視線はエレイサスへと一直線に向けられている。
火球を撃つのか、それとも。
エレイサスはもう死人のような姿で、その行動を伺っていた。
その場の空気が止まる。レウスは広げていた翼を更に大きく広げ、その周囲に風の渦ができるほどに力強く羽ばたいた。
その瞬間。
グギャァアアン!!
その雄叫びは、まるで「死ね!」と叫んでいるようであった。レウスは瞬時にエレイサスとの距離を縮め、強烈な蹴りを放った。目にも留まらぬ早業。
エレイサスもまたその瞬間に盾を構えていたが。
「ぐあぁっ…あ!」
王者の全力をかけた攻撃は、エレイサスの立っていた大地ごと抉った。左腕に激痛が走り、骨が軋み、嫌な音を立てる。どうなっているか、垣間見る余裕もない。攻撃の威力を完全には殺しきれず、彼はそのまま体ごと宙に投げ出された。
エレイサスは半ば気絶していた。地面に叩きつけられ、レウスメイルの鱗が弾け跳び宙を舞う。
エレイサスは力なく仰向けに倒れた。
「エレイサァス!!」
ザンが叫ぶが、エレイサスの反応はなかった。
やがて暗くなってゆく視界の中で、エレイサスは人の温かみに似た安堵さえ感じ始めていた。時間がやけに遅く感じた。視界が逆転している。
――終わった、もう何もかも。エレイサスは自棄になりかける。
「…て」
誰だろう。声が聞こえる。
ふと、ぼやける中に小さな銀の光が輝いた。そして彼は次の瞬間、不思議と何者かの視線を感じる。
「あなたはあなたの誇りを持って生きて」

心に直接語りかけてきた、それは紛れもなく自分が愛した人の言葉。
トクン。鼓動が一つ、再びエレイサスに命を吹き込んだ。
「っ！」
世界に色が戻ってきた。状況を把握して、すぐに行動を起こす。立ち上がると右肩に鋭い痛みが走った。それを無視し、エレイサスは黒い王者と向き合う。赤い筋を頭から流しながら、吹き飛んだ面貌のおかげですっかり視野が広まった兜の間から、その姿を見据える。
「まだだ…」
エレイサスは確りと、二本の脚で地に立った。
確実に獲物を葬ったと思っていたレウスは、その光景に目を疑う。しかしレウスは、「一度でだめなら二度だ」といわんばかりに、同じ攻撃を繰り出そうと体勢を立て直していた。
このままでは確実にエレイサスはやられてしまう。
レウスは攻撃しようと翼を羽ばたかせる――しかし。
「あいにくさま、俺たちにも同じ手は通用しないぜ」
そう言い放ったザン。構えたヘビイボウガンの銃口からは、既に煙が上がっている。
「少し…熱かったな」
ザンの腕は黒く煤けていた。一部機構が破損してしまい、ボウガンの逆火を素に腕へ受けてしまっていた。
彼は未だ煙る腕を上げ、指をたてた。その直後、レウスの羽ばたきが嘘のように鈍くなる。
ザンが今まさに放った弾丸は――〈電撃弾〉。それは着弾時に小範囲に電撃を放つ属性弾だった。
「一撃で決めなきゃならないなら、決めればいいんだよ。『一撃』で」
撃ち出された無数の弾丸は、レウスの甲殻に突き刺さったまま残っていた。彼が狙ったのは、自らが両翼へ撃ち込んだ弾丸。
王は一時的であるものの、己の象徴ともいうべき――翼を失った。レウスは無様に地面へと墜落する。体勢を立て直そうと試みるが、動けない。

ザンは様々な部位に弾を撃ち込んでいた。硬い相手の体が貫通とまではさせなかったが、それでよかった。それが彼の狙いだったのだから。

各部位に撃ち込まれた弾の金属部分に、電撃弾の電流が、天から降り注ぐ雨を通して伝わり、エレイサスが負わした傷から滴り続ける血と混ざって、効率よく「感電」への回路をつくる。

「感電」それはレウスにとっては軽い痺れだったのかもしれない。しかし今は……弱ってしまった今では、もう痺れ程度では済まされない。

レウスが弱っていたかどうか。その確証は二人には無かった。だから、「勘」という狩人最大の武器を用いて――イチかバチかの賭けをした。

状況。

天候。

地形。

道具。

経験。

動物的勘。

利用できるものはとことん利用するという、ハンターならではのやり方で。

「頭脳戦ってやつだ」

ザンは呟き、

「…エレイサス！急げ！」

大きく叫ぶ。

感電が、一時的だがレウスの動きを止めている。

麻痺し、身動きが取れずにもがく「大空の王者」は、低い唸り声を上げながらも――今は何も出来ない。

しかし。

それも長くは続かなかった。レウスは麻痺していた筋肉の感覚を徐々に取り戻していく。

やがて立ち上がれるまでになり、獲物の方を向く――

一突。
一つの輝き、白槍が。レウスの生命の中心――胸部を貫いていた。
次の瞬間、エレイサスの鎧の右側が砕け散り、ヘルムの間からは小さな血飛沫が飛ぶ。衝突の反動だった。
彼の全身全霊をかけた攻撃は、ランスの矛先をレウスの胸から背中へ突き通すに至った。完全に貫通させたのである。
おびただしい量の血が、地面を紅く染め上げた。
グルルルル…
しかしそれでもレウスは生きていた。
強く握られたランスが、レウスの胸からずるりと抜ける。その刹那、力を失った右手はランスを地面へと手放した。重々しい音を立て、地面に落ち、ミラージュはエレイサスの足元に転がる。
…なぜ。
エレイサスは戸惑った。
目の前にいる自分の命を奪うことは、いたって簡単なことであろう。貪欲な肉食竜ならば、道連れにしてでも獲物を殺すに違いない。
でも。
グルル…
レウスは何もせずに彼を見つめる。
その眼には殺意はないのだと、そう感じた。
オオォォォォォォン……
レウスは天に向かって高々と雄叫びを上げる。その叫びは、遥か遠くの空の彼方へと響き渡った。
まるで彼等を認めるように。
そしてそれを世界へ伝えたように。
レウスは彼を潰すことなく、地面へと倒れ伏した。
小さな地響きを立てて、大きな頭はこちらを見た。その瞳には、自分が揺れて映っている。エレイサスはそれを見据え…見据え…見つめ合ううちに気が付く。
そして空の王者はそのまま――まるで石のように硬くなり、
そりきりもう、動かないことに。

「…はあ…」
エレイサスは力が抜けてその場に仰向けに倒れこんだ。すぐ近くには亡骸となったレウスの頭がある。その眼は未だにエレイサスを見続けていた。
エレイサスは兜を外した。顔に当たる雨が、徐々に弱まっていくのがわかる。雨雲から顔を覗かせる青が、彼の目に映った。
「…終わったんだよな」
ザンの問いかけに、エレイサスは無言で頷いた。それから彼はエレイサスの元へ歩み寄ってくる。エレイサスは立ち上がろうとしたが全身に痛みが走り、また寝転がってしまった。
「おっと、無理するなよ。ほら薬だ、飲め」
ザンは痛み止め薬の〈回復薬〉と、自己回復能力促進の薬、〈活力剤〉、劇的に人間の回復力を上げる薬〈秘薬〉…等の殆どを、エレイサスに差し出した。
「い…い…のか？だ…だって…お前、も…」
声という声が出ない。
「遠慮するなら、その掠れきった声を何とかしてからにするんだな」
半ば無理やり、彼は薬を押し付けてきた。
ザン本人も傷を負っていたのに。
たぶん、気遣ってくれたのだろうと思う。
エレイサスは激しい近接戦闘で、腰に下げていた袋の中の瓶がすべて割れてしまった。ザンは無事だった自分の分を彼に渡したのだった。回復薬には痛み止めの効果もある。エレイサスはすぐに小ビンに入った液体状の薬を飲んで、少しずつだが、動けるようになってきた。それから色々な薬を飲み、やがて身体の痛みが引き、もう立ち上がれるくらいにまで回復した。
彼に深く礼を言いたかったが、
どうしてだろう。
今は何も、言葉が出なかった。
エレイサスはふと、隣のレウスに目を移した。
命の力に満ち溢れていた王者は既に息絶え、この世には存在しな

い。
先程まで、この巨体は行きものとして縦横無尽に空を飛びまわっていた。しかし今は、見る影も無い、重たい石造のような存在感があるだけの、ただの抜け殻。
この竜の命を、彼らは奪った。エレイサスもザンも、このようなことを幾度と経験してきた。命を奪いとり、生き残る狩人として。
「エレイサス」
いつの間にか目の前に来ていたザンが、彼に「それ」を渡した。
「…これは」
目を見開いたのは、決して戸惑いからではない。
エレイサスの篭手の中に納まった一枚の鱗は、その命の色を表していた。
「黒」。それがこの王者の色。いわば、それぞれが持つ生命の色。決して同じ色は無い持ち主だけの色。
「うん…」
漆黒の鱗を手に握り締め、エレイサスは少しだけ笑った。
まるで今、ハンターの一歩を踏み出したかのような気持ちになった、それがどこかおかしくて、そしてなにより…誇らしかった。
他者の命を刈り取る事を生業にするハンター。そして刈り取った命を生かすハンターとして生き残り、自分も確かに――ここに居る。
「生に誇りを」それをこの王者の最期に、再度教えられた。
「…感謝しなくては、命にね」
自らの想いを言葉にしてから、エレイサスは漆黒の王者の亡骸に歩み寄っていく。そして目の前に来たところで王者に一礼をし、腰から大降りのナイフ、ハンター達御用の剥ぎ取り用ナイフを抜いた。
ギラリと鋭い、鋼の刀身が現れる。
それを手に構え、甲殻と甲殻の間、柔らかい部位に刃を走らせた。サクサクと、慣れた手つきで彼は手際良くバラし、剥ぎ取っていく。
そのときだった。彼がナイフを扱う手を動かしていると、ふと。
「…まさか、ね」
小さく笑うエレイサス。

艶消しの甲殻の中に一度だけ、眩い輝きを見たような気がしたから。

僕等が生きること

とある町から離れた道に、一人のハンターが立っていた。
兜は外している。
青空の下に立っている青年、エレイサス・アーク。
彼は辺りを見回してからその場に座り込んだ。ガシャリと鎧が音を立てる。それから、動かない。どうやら、何かを待っているらしい。
彼の鎧は以前と変わっていた。以前は赤色が主だった鎧だが、今は赤と黒の二色になっている。
一ヶ月前。塔へ登った際に遭遇したリオレウスとの激闘により、彼の鎧は大破してしまった。特に右の篭手と右肩の甲殻は粉々に砕けてしまい、原型をとどめていなかった。
その破損した部位に彼等が狩ったレウスの素材を使用し、復元した。黒いレウスの甲殻や鱗などは、軽さは通常種と変わらず、硬度が元の倍近くあったために、おかげでより強固な鎧を製作することができた。「復元」とはいえ形状は前のものとは、随分と変わっている。
そんな赤と黒の素材は今、お互いを認め合うかのように組み合わさり、見事な調和を果たしていた。
〈スカイ・プライド〉
「空の誇り」。そう彼自身が名付けた鎧は、まるで主を認めているかのように彼の一部となっている。
小さいながらも威厳に満ち溢れた彼の姿は、まさしく王者の誇りそのものであった。
エレイサスは馬車を待っていた。出発時間はまだだったが、彼はそれを知っていながらもここへ足を運んでいた。
馬車の向かう場所は街だ。といっても、この町のように小さなものではない。広大な、ハンター達の集まる活気溢れる街のことである。
今までこの町で生活し、近辺で狩りを行っていたエレイサス。そんな彼だったが、あの塔の狩りを介して考えが変わった。
というよりも、それはもともと望んでいたことなのかもしれない。あの場所へハンター達が導かれるように、彼もまた導かれていった。

いや、自分で進んでいったというべきだろうか。
ともかく彼もまた、先に旅立った仲間達と同じように答えを出せたのだ。
自分なりの答えを出すことが出来たのだ。
一人の狩人として。

「最後に、話していいかい？」
それまで静かだった道のりの中で、エレイサスは思い切って切り出した。ザンは振り返り、待ちかねたようにこちらをまっすぐに見る。
「ああ、喜んで聞こうじゃないか」
「ありがとう。じゃあ」
二手に分かれた道の丁度真ん中で、
彼らは最後の言葉を――餞別の言葉を、交わそうとしている。
「今まで狩りをしてきて…いや、生きてきて。誰かが死ぬのって、何かを失うのって、凄く身近にあることなんだなと思ったんだよ。僕はそんな、身近にある平凡な死が怖かった。その人を愛せば愛すほどに、失うのが怖くなるって、どこかで分かっていたんだね。…だから一人で行動していて、人を避けていたんだろうと、今は思う」
でも、と。エレイサスは続ける。
「でも、フランと出会ってそれが変わった気がしたんだ。確かに人を愛することは難しくて、怖い事なんだろうけれど、いつまでも逃げていちゃ駄目と……彼女は教えてくれたんだ。人を気にかけることとか、人を心配することとか、人を…愛することも悪くない、むしろ素晴らしいことなんだなって」
エレイサスは穏やかな声で言った。
「今、僕は生きているから」
生きているならば。
「生きていて、これから何でも出来る。…それからあの竜にも教わった。生きていること、それ以上の誇りは、無いってことを」
生きていること。
それは素晴らしくて、誇れること。

「ああそうだ。俺もそう思う」
ザンは同感とばかりに頷き、安心したように微笑んだ。
「いい思い出をありがとう。もし今後会うことがあったなら、宜しく頼むよ。それがいつになるのか分からないけれども、僕はそのときまできっと生き続けているから」
エレイサスは言った。するとザンは、
「そうかい。そりゃ楽しみだ。……俺もまだまだ、死ねないな」
にやりと笑いながら、そう返した。
「まあ頑張れよ。フランも、お前を応援してるはずだぜ。……あと俺もな」
ザン言い、そして豪快に笑う。
「あんな死闘を越えて生きて帰ってきたんだ。これもフランに誇っていいんじゃないか？」
ザンはそう言った。
「死闘か…まぁ…頻繁にはやりたくはないけどね」
思わず、エレイサスは苦笑する。
確かに。それは誇っていいのかもしれないと、内心思いつつも。
「…おかげさまと言っては難だが、いい経験が出来た。謎も解けたし、街の連中にいい土産話が出来たことだし。良かった良かった」
そう、ザンは満足したように言う。
「いい経験…土産話って……本当にそれだけでいいのかい？」
「いいんだよ。なんといっても、今回の報酬は経験だからな」
ザンは腕を組んで頷くと、
「ま、これも手に入れたんだけどな」
背負った巨大な袋を指してそう言った。当然だが、彼はちゃんと素材も持ち帰っている。ちゃっかりしたところは、彼らしいといえばそうであるのだろう。
ザンは指を立てて言う。
「経験が人を強くする。経験が人を豊かにする。今までの経験が重なり合って……今の自分をつくっているのだからな」
傷を負って、人は成長する。

決して癒えることのない傷を負って、人は決して廃れることの無い強さを知る。
「うん」
その意味をエレイサスは、心のどこかでわかっていた。
「それじゃあな、これからも頑張れ」
ザンは組んでいた腕を解いて、
「じゃ、またな！」
右手を挙げ、最後にそう言ったのだった。

エレイサスはザンとの別れを思い起こしていた。
骨折した各所、打撲した箇所…節々が色々と、それらが未だ、ズキンと痛む。
ふと、あのときの共闘が脳裏をよぎった。
…本当に辛い戦いだった。
まだ、傷は治っていない。完治にはあと一週間ほど必要だろう。
すぐに戦闘があるというわけではない。のんびりと、街への移動の日数を使って治していくつもりだ。
今頃ザンは、こことは反対側の停留場に居るのだろう。エレイサスはどこか心地よい風を感じた。ザンもこの風を受けて、同じ気持ちで居ることだろう。
エレイサスはあえて、ザンとは違う街、違う道を進む事を選んだ。親しげな話し相手がいないのも少しは寂しい気もする。
長い間住んでいたこの町との、別れが惜しい、とも思う。
彼女との思い出が沢山、詰まっている場所。
「――それでもね」
答えはもう、出ているんだ。
エレイサスはそっと目を閉じた。行く前にどうしても、伝えておく事がある。
（フラン。今度話を聞かせてあげるのには、どうやら時間がかかりそうだ。でもきっと、時間をかけるぶん、いい話が出来ると思う。だから、お別れだ。でもきっと、いつか戻ってくるよ。こんな身勝手で

ごめん…）
ゆっくりと目を開ける。言い訳ばかりの別れ言葉にエレイサスは表情を曇らせた。考えれば、後ろめたさが少し、心に残っている。
「まったくもって駄目だね…僕は」
エレイサスは思わず苦笑する。が、すぐに表情を固めた。
（…僕は君をいつまでも愛している。そして誇りを持って、僕は生きる。本当に、君に出会えて…良かった。ありがとう）
一番に言いたいことを、いつも言っていたことを。いつも言ってあげたかった言葉を。
彼は今、伝えた。
エレイサスは町を見た。
この小さな町で育ち、出会い、失い、得て、僕はここにいる。
悲しみは残っていると思う。でも、「生きることに誇りを」そう再度、教えてくれた人に報えるように、生きたい。生きてゆきたい。
僕はそう…誓うから。
「来たようだね」
彼の目に屋根がついた馬車の姿が映る。
そこでまた、彼の心に囁きが起こる。「いまならまだ間に合う、ここに残ることも。思い出を手放さないことも」と。
「でもね。もう決めたんだ」
強く、そう言った。
気がつけば馬車が目の前で止まっていた。踵を返し、乗る準備をするエレイサス。
隣に降ろしておいた相棒のような存在、〈竜輝槍ミラージュ〉を持ち上げ先に馬車に乗せる。ミラージュの柄には真新しい革が巻かれている。古くなっていたため新しいものに取り替え、巻きなおした。
新たに旅立つために。
荷物を乗せている最中、エレイサスはふと気付いた。
人影だ。遠くから、誰かが駆けてくる。
一人…いや二人。
見送りだろうか。

今まで一人で狩りをしてきたから、仲間もいない。
町でも、親しい人は少ない。
ザンは自分と同じく別の街へ行く、彼でもない。
では、やはり。
そうこう考えているうちに、二人はエレイサスの目前まで近付いてきていた。
「はぁはぁ…良かった、間に合ったぁ…」
若い、少年と少女。
予想通り…全く、自分とは面識の無い二人組みである。
エレイサスは苦笑した。見送りが無いと知っておきながら少し、どこかで期待していたから。そんな自分は、もしかしたら心のどこかで仲間を求めているのだろうか。と、一瞬考え耽ってしまい、しばしうつむいた。
少年と少女。彼らはどうやら――見たところ二人とも新人ハンターのようだ。武器や防具、それに付いている傷の数、そして彼らの顔立ち。今までの経験からそれらを見れば、おのずとそれは見えてくる。
それはエレイサス本人ですら気が付かなかった、自分がもう一流の狩人として十分であることを、静かに物語っているのだった。
「お客さんたち、出発しますよ」
馬主が三人に言葉をかけた。出発の合図だ。エレイサスたちは慌てて馬車に乗り込む。
そのときふと、少年の目とエレイサスの目が合わさった。次の瞬間、彼の目は尊敬の眼差しへと変わる。こちらが飛竜種の鎧を身に着けているからだろう。
しかし。
その憧れと同時に、強者への畏怖が生まれるのもまた、当然のことだ。
あからさまに、エレイサスにはそれは分かった。
彼らの行動、仕草から。
少年は急に動きがぎこちなくなった。明らかに緊張が見てとれる。

一方少女は別の行動をとっていた。何やら下を見つめてもじもじしている。
いずれにせよ。
（ああ、僕のせいかなぁ）
たぶん「僕」のせいだろう。
この狭い馬車の中でこの緊迫感はまずい。そう思ったエレイサスは痺れを切らして、行動をおこした。
「君たちは、どこへ行くつもりなんだい？」
表情を柔らかくしてエレイサスは言う。これがコワモテだったら逆効果だったのだろうが、幸い自分はコワモテからかけ離れた面持ちをしている。
むしろ若干、童顔だった。
おかげで、二人の心の壁を取り払うのにそう時間はかからない。彼らは次第に、表情を明るくしていった。
「ええと…街へ、この先の街へ行きます」
「なるほど、それなら僕と同じだな」
「そうなんですか？」
少年はすかさず訊いて来た。
「うん。そろそろ僕も、旅立つ時期だと思ってね」
旅立ち。
「ああ、ちなみに僕の名はエレイサス・アーク。見ての通り、ハンターをやっている……って、それは紹介しなくても良かったね」
見れば分かるか。とエレイサスはジョークをかました。
「あの、アークさん」
「うん？」
「街について訊いてもいいですか？僕ら、この町で育ったから、大きな街の事は詳しくなくて…」
「ああ……それなら僕も良く分からないんだ、実は。なにせ、新米だからね」
街なんて何も分からないんだよ。そう、正直に言った。
「ええ!?」

驚きを隠せない少年は勢いよく立ち上がってしまい、天井の柱に頭をぶつけた。音から分かるように…痛そうだった。
「君は何か、訊きたいことでもある？」
エレイサスは少年の隣の、静かな少女にそう言った。
そして返答を待った。
「あの、その、何でもいいのですか？」
「ああ、何でも。まぁ答えられる範囲だけど」
少女の目は前髪に隠れて確認できなかった。顔立ちから言って少年と同等、相当若い。
おそらく歳はまだ十三、十四くらいか。この年で旅立つとは…。
（たいしたものだな）
エレイサスの顔が綻ぶ。
「では、その、ええと…じゃあ…その」
少女の口元が微かに動いて、彼女は喋りだした。何を訊こうとしているのか、手当たり次第に見つけようとしているかのように。
「…あ」
どうやら、見つけたようだ。
「ハンターの心得、教えていただけますか？私達、師匠とかそういう人に教えてもらったわけではないので、そういうの、良く分からないんです」
それは、最初（はじめ）に求め、そしてそれ以来持ち続けている大事なこと。
「ハンターの心得か……生き方みたいなものだね。本当なら、そういうものは自分達で見つけてゆくものなんだけれど。まぁ参考までに、僕の心得でも聞いておくかい？」
エレイサスがそう訊くと、新米の二人は顔を見合わせ、息を合わして――
『はい！』
高鳴りつつある、どこか心地よい胸の鼓動。
若い二人は、自分の言葉を期待して――待っている。
ひとつ咳払いをしようとしたが、気がつけば既に言葉が出ていた。

「これが僕なりの――心得さ」
この広い大地には、様々な生物が命輝かせている。
例えれば――
地を駆ける生物。
水を泳ぐ生物。
そして、空を翔る生物。
これらは多種様々だけれど、
同じ命に代わりないんだ。
この世界の理、生きるか死ぬか。
世界は生と死のありふれる、そんな非情な場所かもしれない。
しかしそれは確かに、世界のありのままを現しているんだ。
残酷だけれども、それを受け止めなければいけない。
そしてその中で人は、生きてゆかなくてはいけない。
僕らが生きること。
それは何処かで、必ず誰かを犠牲にしているということ。
これを忘れてはいけない。
だから。
奪った命のためにも、僕らは生きなければならないんだ。
命は繰り返し、永遠へとつながっていく。
僕たちは生きている。
そして今も。
一つの命として輝いていくために、
未来へと歩み続けていくんだ。
揺らめき、輝く太陽。
どこまでも続く、青空の下。
　揺られる馬車の中。
そこには、青空を夢見た狩人がいた。
大空を翔るという限りなく不可能に近い夢。
例えそれは無理かもしれない。
一生かかっても届かないかもしれない。
――しかし、それを持ち続けることが本当は大事なのかもしれない

と、そんな多くの想いを馳せながら、彼は行く。
ふと、空を見た。
澄み渡る蒼空が、旅立ちに祝福をしてくれている。
ささやかな、とてもささやかな祝福。
彼はすっと空へ、手を伸ばしてゆく。
「故郷へ…」
小さく口を開いて、
隣の二人に気付かれない程度に、
そっと。
「今までありがとう。…じゃあ、行ってきます」
――餞別の言葉としては、少し物足りない気がしたけれど。
彼は旅立った。
空を追うものとして。
生きているということを、誇りながら。
二つの約束を――果たすために。
思い出を刻んだ銀のペンダントが、誇らしく輝いた。
〈終〉